

アジア女性基金公開フォーラムの記録

**東京・新宿発一日韓協力の  
新しい街づくり**  
(住民・生活次元の日韓対話)

2005年3月12日13:30~17:00  
ホテル海洋・カトレア（東京・新宿）

**主催**

財団法人女性のためのアジア平和国民基金  
(アジア女性基金)

**共同主催**

財団法人 新宿文化・国際交流財団

**後援**

外務省 新宿区

## 趣旨

東京・新宿は、とくに日韓関係が生活・文化の面で大きく深まり、ひろがった地域です。韓国のテレビドラマ放映が旋風を起こし、その「韓流」の追い風で、韓国の料理、ドラマや映画、Kポップス、食材・物品、雑誌・写真集などを求めて、一層、多くの人々があつまり、にぎわっています。「韓流」は、たしかに、多くの日本人が韓国人・韓国・韓国語をより知ろうとする大きなきっかけをつくりました。サッカー、ワールドカップの共催、そして映像や音楽を中心とする韓流は、それぞれひたる層は違っても、韓国・韓国人を身近に感じ、より理解しようとする人々を増やしました。

日韓の間では2004年、相互に417万人が往来しました。日本から韓国へ243万人（38%増。女性が占める割合は37%から43%へ）、韓国から日本へは174万人（韓国法務部による）。ここに、日韓の交流が大きく進んでいる事実とともに、はっきりと「韓流」人気は反映しています。そして、新宿区は、外国籍の人々が東京都内1位の約3万人、人口の10%にあたります。

このような現実にあたって、日韓双方の事業者・住民、そして観光をふくめ訪れる人々が、どのように新宿の未来を描くか、そこになにを期待するか——。生活・文化の次元で協力する、日韓関係の新しい展開のための対話の場として、このフォーラムは設定されました。もちろん日韓に限らず、多様な人々が暮らす個性のある街づくりへのステップとなり、「東京・新宿」の国際的発信につながる「新宿モデル」になっていくようにと願っています。

財団法人女性のためのアジア平和国民基金（アジア女性基金）  
財団法人新宿文化・国際交流財団

## 内容・構成

### あいさつ—— p.5

中山弘子 新宿区区長

伊勢桃代 (財) 女性のためのアジア平和国民基金専務理事・事務局長

### 基調発言—— p.11

小倉紀藏 東海大学助教授、NHKテレビ「ハングル講座」講師

金根熙 (キム・クンヒ) (株) 韓国広場社長

休憩——韓国伝統茶、水、お茶あり

### パネル——随時、会場やりとり p.33

パネリスト：

三澤治男 大久保いぶき町会副会長

植木康次郎 大久保いぶき町会環境衛生部長

金根熙 (キム・クンヒ) (株) 韓国広場社長

森田忠幸 新大久保商店街振興組合理事長

金世煥 (キム・セファン) 在日本韓国人連合会事務次長

李承珉 (イー・スンミン) 新大久保語学院院長

小倉紀藏 東海大学助教授、日韓友情年2005実行委員

小柳俊彦 新宿区企画課長

コーディネーター；

柳田富美子 (財) 新宿文化・国際交流財団国際交流担当課長

### 閉会あいさつ—— p.80

須磨洋次郎 (財) 新宿文化・国際交流財団常務理事



## 公開フォーラム

### 「東京・新宿発一日韓協力の新しい街づくり」

司会・進行(「基金」間仲智子)——それでは、(財)女性のためのアジア平和国民基金、(財)新宿文化国際交流財団共同主催による公開フォーラム「東京・新宿発一日韓協力の新しい街づくり」を始めます。本日は土曜日の午後にも関わらずこのようにお集まりいただきましてありがとうございます。

このフォーラムは「日韓友情年2005」参加企画として、外務省と新宿区の後援をいただいています。受付でお配りいたしましたプログラムに質問表とアンケートがはさんであります。パネリストの方への質問やご意見がございましたら、質問表にご記入のうえ、基調講演後の休憩時間の時にスタッフにお渡しください。パネルディスカッションの際に、各パネリストからお答えいただきます。では、まず中山弘子新宿区長よりご挨拶いただきます。

#### あいさつ 中山新宿区長

中山弘子新宿区長——皆さん、こんにちは。ご紹介いただきました新宿区長の中山弘子です。本日「東京・新宿発一日韓協力の新しい街づくり」にこのように多くの方々が関心をお持ちいただき、お集まりくださいましたことを本当にうれしく思います。今年は日本と韓国の間で国交正常化40周年という節目の年に当たります。

「日韓友情年2005」と銘打って様々な記念行事が全国各地で開催されるというわけで、この一環としての本日のこのフォーラムを地元・新宿区として後援することが出来ますことを私はとてもうれしく、また有意義なことであると思っています。

実は私ごとになりますけれども、私は昨年、念願かなって家族で初めて韓国のソウルを訪れることが出来ました。韓国というのは、日本に一番近い国で本当に親しみを覚えたところです。街には活気が溢れていて、人々にはエネルギーが溢れているのだなど。そして、私は植物とか花とか好き

なのですけれども、植生も似ているなというのか、懐かしさみたいなことも感じたところです。

それと私自身は、ソウルの街が高速道路を撤去して、水辺を取り戻すというような街づくりを進めていることにとても関心を持っています。日本では昨年からテレビドラマや映画を始めとして様々な形で韓国の文化に触れる機会が増えて、先ほども映像が流れていましたけれども、韓国が本当にぐっと身近になっていると思います。

そして、韓国と日本を行き来する人たちが増えていきます。この新宿の街、大久保通りとか、職安通りの辺りには、韓国の料理店、食材店、物品店などたくさんあります。日本各地からこの街を目指してやって来る観光客も増えていて、本当に賑わっています。

皆さま方のお手元の今日のご案内にも書いていますが、新宿は、韓国出身の方々が多く住んで働いて勉強していて、韓国学校もある。そういった街です。新宿は人口が30万の街ですけれども、外国人登録者数だけで見ましても3万人弱ということで、人口に占める割合の1割という数は、東京都の中でも1番です。

先ほど金さんと話した時にも「欧米の都市が1割なんですね」という話がありましたが、本当に一つの地域を変えるというか、そういった数になっているわけです。そして、3万人弱の中で、韓国、朝鮮籍の外国人登録をしている数が約1万1千人強で、全体の4割を占めていて、数としても一番多いのです。

この数というのは、外国籍の方々がこの街にもともと住んでいる日本人と隣り合わせで生活しているわけです。異なる文化や生活様式を持つ人々が同じ街に共に住むということは、日々の生活における互いの違いを認識することでもあると思います。言葉の壁であったり、生活の仕方の差であったり、それから感覚や考え方の違いとか、共に住む住民としてそれをどう克服して行くかというのも、大きなチャレンジであると思います。

新宿区では外国人の定住化がここ20年の間で非常に大きく進んで来ています。区内の小中学校にも日本語を母語としない、いろいろな国からやって来た子どもたちが増えていきます。私は区長になって2年ちょっとになりますが、新宿のこの街の現実をしっかりと受け止めて、外国籍の方が多いということを新宿区の積極的な特徴としてプラスイメージを発信出

来るような、そういった多文化共生の街づくりをしたい。そんな思いでいっぱいです。

このことは、行政としてそういうスタンスを持っている、行政としての考え方を発信して行くことと併せて、今日のような会合が開かれるということは、私は、とても意義があることだと思います。それは、地元の方々の本音で自分たちがどう在りたいと思っているのか、そういうことをお互いに顔が見える関係になって伝え合っていくということが必要だと思っています。そういう意味で、今回の会合にはとても私は期待をしているところです。

## 元気な街、ふところの深い街へ

確かに様々な文化を持った人々が共に住むということは、興味深い素晴らしいことです。けれども、まず最初に直面することは、いろいろなことで当たり前だと思っていたことがなかなか通用しないとか、いっしょに住むということが大変なことだと認識せざるを得ない状況があるわけです。

しかし、私は日本人の住民と外国人の住民が互いに協力して現実の中で課題に直面して、克服して行ってこそ、この21世紀の豊かな地域社会を実現して行けるのだと思っています。21世紀のキーワードは「多様性」だと思っています。それは「多文化共生」ということでもあります。そういう意味で新宿区は、先ほど申し上げましたように全国でも有数な、外国人の多い街というのを積極的な特徴として、日本人も外国人も含めた住民が互いに協力して意見を出し合って、他者を認め合いながら気持ち良く住んで集う、そういう懐の深い街をつくって行きたいと思っています。

先ほども申し上げましたように、本日は日本と韓国の住民、そして事業者の方々が直接、これからの新宿の街作りについて話し合う貴重なフォーラムです。この機会を有効に活用して、皆で知恵を出し合って、この地域社会を皆で担う仕組みづくり、そういったことをしていただけるのが私の願いです。新宿のキーワードは「元気な街」でありたいと思っていますので、まずは日韓が協力して賑わいのある元気な街・新宿を全国に向けて発信する出発点としていただけたらと思います。

結びに当たりまして、このような機会を提供していただきました(財)女性のためのアジア平和国民基金に心より感謝を申し上げまして、私のあい

さつとさせていただきます。本当にありがとうございました。(拍手)  
司会 中山区長、どうもありがとうございました。続きまして、伊勢桃代  
アジア女性基金専務理事事務局長よりごあいさつ申し上げます。

## あいさつ——アジア女性基金 新宿から地域のあり方の発信を

伊勢桃代——本日のフォーラムの開催に当たり、一言ごあいさつ申し上げます。本日は土曜日にも関わらず皆さまお忙しいところをご参加いただきまして誠にありがとうございます。またご後援をいただきました新宿区長の中山弘子様にはご多忙の中わざわざお越しいただき、冒頭にごあいさつを賜り、ありがとうございました。本当に皆さんの気持ちが伝わるようなお話だったと思います。

このフォーラムは、新宿文化国際交流財団との共同主催で、また新宿区が後援に加わっていただきました。このように住民の方々の生活レベルでの日韓関係をより深めることの出来るフォーラムが開催出来ますことに心から感謝いたしております。

さて、私どもアジア女性基金は、かつての慰安婦の問題について政府の道義的責任の観点に立って、政府と国民の協力でその償いを行うこと、合わせて女性の名誉と尊厳を守ることの重要性を啓発する事業などを推進するために設立されました。本年で10年目を迎えることになりました。

この間、アジア女性基金は、過去の問題を歴史の教訓とし、アジア近隣諸国との友好増進のためのプログラムを実施して参りました。日本と韓国に関しましては、過去の歴史を踏まえながら、未来に向けて日韓学生によるフォーラムなどの事業を重ねて来ております。未来志向の日韓共同宣言、日本文化の開放、ワールドカップサッカーの共同開催などを経て、韓国ブーム、いわゆる韓流が多くの人々の交流によって韓国への興味と、韓国語の学習熱につながっている状況にあると思います。

日韓関係には現在いろいろな問題があります。しかしながら、やはりこういう新宿のように皆さんがいっしょに共存して行こうという熱意と若い人たちの熱意により、希望が持てる未来になるかと私は思います。

新宿に足を運びますと、と言っても私ちょっと骨折して今日参りました、



本当に個人的に熱意、エネルギーを与えられるというような感じがいたしました。そしてここに住む皆さま、商店などで事業されている方々、日韓交流の未来に興味と期待を持っている方々が一堂に会し、率直に話し合われることは大変意義のあることと存じます。

今日のフォーラムに関しましては、私どもアジア女性基金としては、新宿に限らず、ここから日本にいろいろなことを発信していただきたいという思いがございます。というのは、日本というのは実際に中を見てみますと、いろいろな文化があるのですけれども、外から一貫して他の国とも比べて見ますと、単一民族、単一文化、単一の考え方というような国に見えます。そして外国からの考え方等を受け入れることが非常に難しい国とも考えられます。

しかし、21世紀。これからはそういうことでは、どこの国でもどこの人間でも生きて行くことは出来ません。先ほど区長さんがおっしゃったように、21世紀のキーワードは、多様性。皆が違った考えを持ち、そして色々な文化から来ている、その中からどうやっていっしょに共存し、そしてそのアイデアからまた自分たちの文化を先に発展させて行くかということを考える。これが21世紀に課せられた大きな課題だと思えます。内紛にしましても戦争にしましても、もっと多様性というものを理解出来れば、これからは平和なものに進んで行けるかと思えます。

この新宿というのは、日本に入って来られる外国人の方たちの数字などを見てみましても、いまの日本の一つの縮図、そして将来を暗示するものかと思えます。ですから今日のようなフォーラムでもって、率直に意見を交わし、新宿での皆さまの本当の生活から出たお考えを行政に反映させる機会などに役立てていただき、こちらとしましてはこれからの日本の在り方、いろいろな地域の在り方に教えられるものがあると思っております。本当に今日はありがとうございます。よろしく願いいたします。(拍手)

司会——ありがとうございました。それでは基調発言をお願いしたいと思います。お一方目は、東海大学助教授であり、NHKテレビハングル講座でおなじみの小倉紀藏さんです。よろしく願いします。



基調発言・小倉紀藏東海大学助教授

## 基調発言——小倉紀藏助教授

小倉紀藏——皆さん、こんにちは。小倉紀藏と申します。土曜日なのにこんなにたくさんお集まりいただいて、本当にありがとうございます。

今日の貴重なお集まりで、基調発言のような重要な役割を担うことは本当は出来ないのです。つまり私はこの街に住んでいるわけではございませんし、この街と特に深い関わりがあるわけではないのです。たまたま日本と韓国との関係はどうあるべきかということは考えております。そういう意味で、この街の在り方を外側から拝見することは出来ますけれども、実際はこの街で暮らされて、そして商売されて共生されている方々のお話が一番重要だと私は思います。

今年日本と韓国の間で行われている「日韓友情年2005」の実行委員をやらせていただいています。その一環で要所要所と言いますか、いま重要な所はどこかを見ていて、そこにはぜひとも顔を出したいという気持ちがありましたので、こうやって顔を出させていただきました。

先々週はもう一つ重要な所として、島根県が本当はいま重要だと思いますけれども、島根県に甘えることは出来ませんで、島根県のお隣の鳥取県鳥取市に行って参りました。鳥取市がなぜ重要かと言うと、新宿区とまったく逆の事例だと思うのです。鳥取市は最近周りの町村を合併して、ようやく20万都市になりました。ほとんど周りに韓国人がいない環境で日本人の方が暮らされているのですけれども、韓国ブームと言いますか韓国熱がものすごく熱くて、何と外務省のほうに、「日韓友情年にこれを認定してください」と挙がって来る企画の、最初のうちはほとんどが鳥取市と鳥取県からということでした。

それほど熱意がある。熱意の固まりになっているということです。でも実際に交流したいし、いろいろなイベントは考えるのだけれども、実際の韓国人と交流出来る機会はなかなかないということだと思います。

それに比べると新宿区は、先ほど区長さんからお話があった通り、人口が30万で鳥取市よりもずっと大きいわけです。そして韓国人の方もたくさんいるので「ここに来ればなにかが起きるだろう」。そういう期待感を

持って、最近は日本全国から皆さんいらっしゃる。そういう状況だと聞いております。

私も以前はここによく参っていたのですが、最近はずっと足が遠のいてしまいました。というのは平日の昼間に来ると、ものすごいパワーの奥様がたくさんいらっしゃるので、あまり近づかないほうがいいですよ(笑)誰かから言われてしまいました。ああ、そうかそんなに危ないのだったらハハハハ、申し訳ありません。全然危なくないですよ。近づくのをやめておこうと思っているので。

私の大学の学生はここが大好きで、私の後でお話しされる金根熙社長がやられた「韓国広場」。ニューカマーのコリアンの発祥の地は、おそらく「韓国広場」だと思うのですが、そこにもよく私の大学の学生が行っております。そして、私に新しい情報を教えてくれるのです。私よりも学生のほうが新しい情報をキャッチする能力が非常にあります。私なんかは古いとよく言われます。

この新宿というのは、区長さんのお話にもあった通り、日本における新しい日本を創る。こう言う言葉を使って良いかどうか分かりません。ちょっと不快になられる方もいらっしゃるかもしれませんが、おそらく「実験の場」だと思うのです。

## 開かれた社会になるか、瀬戸際

日本がより開かれた社会になるかどうかという瀬戸際にあると私は思います。そして、より開かれた社会にならなくてはならないということは自明なことで、これは論議の余地はない所だと私は思います。

ではそれをどういうふうにすれば良いかと言う所だと思います。それに関してはこの後に非常に具体的な熱い議論が戦わされると思います。私はそういう具体的なお話についてはなかなか関われないと思います。もうちょっと大きなレベルと言いますか、もうちょっと抽象的な日本と韓国の関係で言います。今年なぜ「日韓友情年」という名前を付けたかということ、これは日本と韓国の間にもいろいろな問題が生じる年であるなということが、あらかじめプログラムされていたということだと思っております。

日韓国交正常化の40周年に当たります。韓国から見れば解放。日本から見れば敗戦60周年です。100年前には日本が韓国を保護国にして、外

交権を奪って実質上の植民地の一步手前まで行った条約が、日露戦争の最中の1905年に結ばれております。それから100年ということでもあります。それから今年教科書検定がありますし、靖国神社にも参拝されるかどうか分かりませんが、そういうようなこともあるということで、あらかじめ今年はいろいろな問題が生じるだろうなということです。

ではそれをどうやって克服するかという時、友情という非常に抽象的ではあるけれども、非常に重要な言葉が出て来たのだと私は推察しているのです。友情という、1人ひとりの個人の感情の問題に関して国家が「今年は日本と韓国の友情ですよ」と規定して来る、これ自体が間違いだという考え方もあるかもしれません。けれども日本と韓国の間で、いままでの友好というものから一步踏み込んだ友情という関係を築かなくてはいけないのだと多くの人が納得されている。そういう状況であることもおそらく確かだと思います。

あと、友情という言葉の定義をどうするか。どういう友情を築くべきかということが我々に課せられた問題だと思うのです。よく日本人が韓国に行きますと、韓国人同士で腕を組んで歩いていますよね。特に女の方が。ああいう非常に皮膚の接触が、日本人よりもはばかることなく行われる。そういう韓国の非常にべったりした感じの友情に対して、魅力を感じる日本人、特に若い人もたくさんいます。私の大学の学生を例えば20人くらい韓国に連れて行くと、そういうものすごく何て言うのかな。分け隔てのない、情の厚い友情というものが、素晴らしいと思って日本に帰って来る学生がおそらく半分くらいです。

ところが後の半分くらいは「私はあそこまでは出来ない」。韓国人のことを大好きなのだけれども「ああやって1度友達になってしまうと、自分と相手の間の垣根がまったくないかのように振る舞うのが友情なのよと。そういうような定義を一方的にされるのは、ちょっと個人主義の世界に生きてきた私としては抵抗がある」と言うとは見えています。

これは年代によっても、暮らして来た背景によっても違うでしょう。寅さんみたいな背景に暮らしていた方は、韓国式の友情のほうがすごく身近で入り込み易いかもしれません。

それからもう一つは、すごく寂しい人。日本社会でもものすごく寂しく暮らしている特に若者なんかは韓国に行くとなんかスゴクとはまってしまふとい

うことがよくあります。これは日本社会で誰にも相手にされなかった人が韓国に行くと、すごく構ってくれるので、嬉しいということがあると思います。

そのように友情というのは、いろいろな形があると思うのです。それは国家がこうあるべきだと決めることでもありませんし、ある集団の中でも統一性を取る必要もない。個人個人の問題で構わないと思うのです。けれども友情を培わなければならないという、そういう土台がまず出来上がってその上に我々がいま立っているのだという認識が、非常に重要ではないかと思えます。

先月の末辺りから日韓の関係で、我々日本人にとってはちょっと理解し難いようなことも起きています。これほど日本人が韓国のことを好きで、韓国語を学んだり、韓国に行ったり、そういうような韓国ブームがあって韓国に対してほとんど偏見のない人たちが増えて来た。

そういう状況にあって、また韓国側がいろいろな歴史認識問題とか領土問題で、非常に厳しいことを日本に言って来ているようで、なにか違和感を感じたり「何だ。韓国の人ってやっぱりこうなのか。我々のラブコールがあまり通じなかったのか」。そう思われている方もおそらくいらっしゃると思うのです。

私の考えですけれども、やはりここは日本と韓国の考え方の違いを認識する必要があると思います。日本人が認識するだけではなくて、韓国の方にも認識していただかなくてはならないと思うのであります。領土問題に関しても歴史認識問題に関しても、私が両方の方の意見を聞いていて、日韓の間で非常にギャップがあると思うのです。お互いに議論が全然かみ合っていないという感じがします。

竹島の問題で私は外務省の方から聞いたのですけれども、韓国側がいち早く言って来たのは「外務省はなにをやっているのだ」と。つまりあれは島根県という県議会が「竹島の日」を制定しようと、条例を制定しようとしました。もう制定されつつあるのですけれども、問題が起きた時には「制定しようじゃないかという段階で、国が外務省がそれを押さえるべきだ」と。要するに「中央政府が地方を押さえることは、簡単に出来るはずじゃないか。「日韓友情年」というものを本当に真剣にやるという意志があったら、そういうことをすべきだ」と韓国側が言って来たのだそうです。

日本側は「それは出来ない」と。つまり「中央政府が地方の動きに対してあだこうだと言うことは出来ない。ましてやそれを押さえつけるなんてことは出来ない。そのの所は日本の政治、行政の仕組みというものをつかっていたかかないと、非常に困るのだ」というようなことで、お互いにかみ合っていない。

韓国的な感覚で言えば、これは押さえつけることが出来るのです。中央の方向性に邪魔になるような動きを中央が押さえつけることが明らかに出来るのです。「出来るのだ」と思っている人たちが多いのでしょう。韓国の場合は、地方自治と言ってもまだ10年ぐらいしかその歴史がありません。

そういうような認識のギャップがあります。認識のギャップがあると、どんどんそういうものが積み重なって行って、まったく相容れないかのような立場の違いになってしまう。

この間、韓国から国会議員が4、5人いらっしゃいました。「議論をしよう」というので、私と議論をしたのです。彼らが言うのは非常におもしろい。「日本の学校で、日の丸だとか君が代というものに対して、尊敬の態度を示さないような学生だか先生だかがいて、それが問題になっているようだけれども、何で問題になっているのかさっぱり分からない」と言うのです。国会議員がですよ。要するに「そんな不埒な先生や生徒や学生がいたら、これは韓国ではとんでもないことだ。問題にする以前に、こんな先生は首だし、そういう生徒は大変な処分を受ける」というわけです。

でもそれは、日本では問題になり得るわけです。憲法で保障されている「思想信条の自由」とか「表現の自由」ということを考えれば、それは十分に問題になり得ることです。それは個人の自由であるという点で議論の余地がある所だと、日本人たちの多くは考えると思います。けれども韓国人たちは「そこは議論の余地がない所である」と認識していると思います。なぜそういうことが問題になっているかということ自体が分からないということは、要するに韓国人たちは、日本社会のことを知らないということです。

2001年の教科書問題の時にもありましたけれども、4年前の2001年のその時点では韓国の多くの人が、日本も韓国と同じように国定教科書なのだろうと思っていたわけです。

教科書問題が起きてその後に「あ、そうか。日本では教科書というのは

たくさんあって、その中で選べる」。もちろん生徒個人が選べるわけではございませんけれども「選ぶ自由があるのだ。韓国のように国定教科書が一つだけしかなくて、大学入試も完全にそこから出される。そういうようなシステムではないのだ」ということを韓国の人がおそらく2001年の時に初めて知ったのだと思います。

そういうように認識がどうも違う。認識の土台が違う。出発点が違うという所が、非常に問題です。ですからどんどんこういう場を通して話し合わなくてはいけないし、話し合うことによって「あ、これは新しい問題を突きつけられたな」と、そういうことにもなると思うのです。

その韓国の国会議員は「あっ」と虚を突かれたような顔をしていました。つまり国旗に対して敬礼をしなくても良いという自由は、おそらく彼は、まったく頭の中になかったのだと思います。日本の状況を知ることによって「あ、それが自由なのか」ということをおそらく知った。韓国でそれが出来るかどうかは別ですけれども、また違う考え方を手に入れることが出来たということです。

お節介ですけれども、これは収穫ではなかったかなと思います。そして我々も韓国の人たちから学ぶことが非常にたくさんあるのです。例えば政治の民主主義的なやり方です。どれほど民主主義が成熟しているかという意味では、おそらく韓国よりも日本のほうが成熟しているとは思いますが「ラジカルな政権交代が出来得る。そういう政治の仕組みをとにかく作って行くのだ」という意志においては、日本人よりも韓国の人の方が一歩先を進んでいると私は考えています。そういう所から学ぶことも出来そうです。

## ルックコリア、ルックジャパンを

今年の「日韓友情年」の、友情というものの一つの定義は日本人1人ひとりがお考えになれば良いことですが、私なりの定義として、今年1年間とはとにかく「ルックコリア、ルックジャパン」をしようと提唱しています。「ルックコリア」とは、韓国に学ぶということです。これはマハティール首相がかつて「ルックイースト」と言った。「ルックイースト」という時の「イースト」は、主に日本です。「いままでは欧米に学び過ぎた。これからは日本に学ぼうではないか」ということで「ルックイースト」と



いうことを言った。それと同じように、我々は韓国から学ぶことが出来るような時代になったのです。

これは民主主義という価値と経済的な規模。それから情報社会、情報経済というものになった、そういう経済の質です。ジャンジャカジャンジャカ大量生産しているだけではなくて、情報化というものに非常にシフトした。そういう韓国経済の質が、日本と非常に似通って来ている。

ということで、価値の共有が非常に出来易くなっている社会を、おそらく初めて日本はアジアに見出すことが出来たのだと私は思います。これは決して日本にとって傲慢な言い方にはならないと思います。かつては福沢諭吉とか長谷川慶太郎さんとかいらっしやいました。そういう方々が「日本は韓国としか手を結べない」と。福沢諭吉もももとは「韓国と手を結ぼうではないか」と言っていたのが挫折して「脱亜入欧」のほうに行ってしまったわけです。経済評論家の長谷川慶太郎さんも「日本が手を結べるのは韓国だけだ」と。

これは主に経済的な観点から言っていたことですが、いまは経済的な観点だけではなくて、社会をどう創って行くか。政治をどうして行くかという、そういうようなことに関して日本と韓国は、お互いに学び合うことが出来る。そういう関係になったと私は思います。こういう関係をアジアの中に作る事が出来る幸福を、初めて日本が味わうことが出来る、そういう時代だと思えます。

日本は「ルックコリア」することによって、また逆に「ルックジャパン」、つまりもう1度日本を見直すことが出来るようになるだろうと思えます。韓国を見習うことによって「あ、日本もこうだ。日本もこういう良い所がある。これをどうしようか」というように「ルックコリア」することによってまた「ルックジャパン」に帰って来る。これは韓流ファンの方々がやっていらっしやることです。「韓国のドラマって素敵」となって「じゃあ日本はどうすれば良いのかしら。日本の人ももう1度、ベ・ヨンジュンさんみたいに素敵になるにはどうすれば良いかしら」。そういうことを考えていらっしやる方々がたくさんいます。

それから韓国のほうも「ルックジャパン」してほしいと私は思います。「もう日本から学ぶことはないよ」というようなことをおっしゃる韓国の方が、結構たくさんいらっしやるのですけれども、私は全然そうだとは思

ません。日本から学んでいただければ、非常に役に立つようなことがたくさんあると思います。ですから韓国の方は「ルックジャパン」することによって、もう1度自分たちの国をルックすることが出来るでしょう。

そういう日本と韓国の関係がとっかかりになって、アジアの中でそういう関係をどんどん創って行く。つまりベトナムをルックするとか、そういうような関係にこれから30年、50年、100年後にはどんどんなっていくでしょう。そういうアジアの中での関係が創られることによって、おそらく初めて東アジア共同体というものが、経済的な関係だけではなくて、価値の共有という意味で一つのまとまりになって行くのだと思います。

そのまさに第一歩というのが、日本と韓国の関係であります。もし新宿区が、日本人と韓国人の共生ということが成功裡に行われることが出来るのであれば、アジア全体の一つのモデルとして定着する。そしてアジアに発信することが出来るのではないかと、私は思っています。

先ほどの言葉で言えば、非常に重要な「実験」をいま新宿区がしているのです。新宿区にお住まいになって経済活動されている方が主役ですけれども、買い物に来たり、あるいは遊びに来たりする方たちも共にアジアの中の新宿、アジアの最先端の新宿を創って行く。そういう役割を担っていると思うのです。ですから私も、新宿にもうちょっとひんぱんに参ろうと今日は思いました。拙い話でしたけれども、私の話を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。(拍手)

司会——ありがとうございました。続きまして「(株) 韓国広場」社長、金根熙さんよりご発言をいただきます。よろしく願いいたします。





基調発言する金根熙（株）韓国広場社長

## 基調発言——金根熙社長

金根熙社長——「韓国広場」の金と申します。座らせていただきます。皆さまに簡単なレジユメを用意させていただきました。私は、いままで自分がやって来た話を中心に少しお話しさせていただきたいと思っています。

日本で新宿以外の所でも何カ所か街づくりの話をちょっとして来ましたけれど、自分の地元である新宿でやるのは初めてです。非常に感謝しているし、ものすごく上がっています。ふだんはこのくらいでは上がらないのだけれど、非常に上がって話の前後がおかしくなるかもしれませんから、理解してください。

「私を新宿住民にした3人の日本人」という一番目の話です。実は私は日本に来る前に、日本にいる後輩に「部屋を探してくれ」ということで、たまたま新宿に住所を置いたのです。それが1986年(昭和61年)9月の話です。略歴にもちょっと入っていますが、来日した年の12月に、当時の日本の通産省の外郭団体の客員研究員として行った時、そこに伊藤忠関連の部長である川端さんという先輩がいらっしゃいました。その方もたまたま同じ日にその研究所に向向で来ていらっしゃっていたのですが、最初は知らなかったのです。私に「金さん、食事をいっしょにしようか」とか、いろいろ私にすごく親しくしてくださった。「どうしてかな」と思ったら「実はあなたと私は同級生だ」と言うのです。「えーっ。こんなに年が15とか20も差があるのに、同級生かな」と思いましたけれど、その先輩が私にいろいろな話をしてくださいました。「あなたが日本で住むならこうこう」と言ったのです。二つのうちの一つが「引越しするな」ということです。「もし引越ししても、電話番号が変わる所にはしないでくれ」と。「日本はもともと未だに村社会的な要素がたくさんあるから、引越しをひんぱんにすると信用がないのだ」と。

もう一つは、例えば「自分たちがせっかく良い友達になって、あなたになにかをしようとして連絡しようとしても、あなたが引越しすれば連絡する方法がない。だから引越しするな」と。それを未だに守っています。ずっと新宿区で電話番号も変わらないで、ずっと守っています。

新宿の大久保1丁目で、家賃を支払うのですけれども、たまたま研究所の給料日が25日だったから、月末ではなくて時間があれば26日とかに不動産屋に持って行ったのです。26日でも27日でも持って行くのです。月末になったら、どんな約束があるか分からないから、必ず26、27、28の間には持って行った。

ただそれだけだったのに、その不動産屋をご存知だと思いますけれども、渡辺さんという所の渡辺おばさんはどこに行っても「金さんは韓国人だけれども、下手な日本人よりずっと堅いよ」と。私は下手な日本人よりは堅い人ですよ。その次に「堅い」という言葉が、その次には「良い人だよ」「信頼出来る人だよ」と。でも必ず前には「金さんが韓国人だけど、下手な日本人より」が付くのです。どこにいても宣伝してくださったのです。「あ、これがある意味で村社会としての大変さだな」と思ったのです。

その次には、大久保通りで新田屋という不動産とかインテリアショップをやっていたら先代の新田屋の社長は、早稲田大学の大学院の研究生の後輩が韓国から来て、しょうがないですね。韓国から日本に来るのに。私が「ちょうどそこが良いから部屋を貸します。何とか用意してください。お願いします」と言うのと「分かった」と。行ったら「まだ日本に来てもないのに、その人の名前に出来ない。金さんの名前にして責任を持ってください」と言うので「分かりました」と。大家さんに話したら「保証人はどうなのだ」と。その時、新田屋の社長が「金さんに保証人を要求するのは失礼だよ。私がやるから」ということで保証人になってくださった。

あの言葉が、私にとってもものすごくほめ言葉に聞こえました。亡くなった時、ずっとお葬式にも私は全部参加しました。そのようなことを「ああ、これか。この方たちが私を新宿から引越し出来ないようにしたのだ」と。私が住民としての意識を芽生えるようにしてくださった方たちです。

このお二方は亡くなりましたから言えますけれど、ここにもいらっしゃるけれど、コンミサオさんは隣だったのです。たぶんミサオさんが先に声をかけてくださったのだと思います。通る時にいつも声をかけて「こんにちは」と言ったり、仕事の様子を見たり。その時、私は学生でした。ある意味ではそんなふうに声をかける、あいさつすることによって、悪いことは出来なくなった。私はそんなに良い人ではないのですけれども、ずっとあの渡辺さんというおばさんが「金さんは良い人だ。堅い人だよ」とおつ

しゃっているから、悪いことは出来なかったのです。もともとは悪かったかもしれませんが、それが私のある意味で、住民としての経験です。

## 日本も韓国もアジア

二番目の「日本も韓国もアジア」というタイトルは、私の考えです。日本に来て入った研究所で、ちょうど経済元年の86年になにがあったかという、ウルグアイ・ラウンドです。ご存知ですよ。いまのWTOとかTRIPSとか、ウルグアイ・ラウンドの協議が始まった年です。ある日ふっと私は、ウルグアイ・ラウンドの話はもしかしたら100年前とまったくいっしょだなと。100年前は欧米が先に産業化して軍艦を作ったり鉄砲を作ったりその軍事力を持ってアジアを侵略して来ました。アジアに黒船で「解放しなさい」というような話です。私たちが自由に行って活動出来て、ものを売って安く買えるようにしてくれというような要求でしょう。いまの日本から言うといまから20年前の1986年の話ですが、それがちょうど100年前と同じです。もちろんいまでも百何十年前です。いまはWTOでその時はウルグアイ・ラウンドをもって、自分たちの主に経済的な社会システムをもって「では解放しなさい。これがフェアですよ」。文化も背景もなにも違うのに「解放する。これがフェアですよ」と。

その話を聞いた時「これが本当にフェアかな」。同じルールで、例えば「大学生と小学生が相撲を取ることをフェアだよ、ルールがいっしょだよ」。そのように私の耳には聞こえました。

「それでは100年前といっしょだな。ではどうすればよいのか」。危機感を感じて考えて、アジアが協力するしかない。その当時EC、ヨーロッパは1958年の葛藤を通じて、その次にはECを作ってEUの展望を打ち出した時でしょう。「ではEUを作ります」と。いまはもうユーロが出来ましたけれど「通貨まで統一します」。あの衝撃。北アメリカは自分たちはちゃんとシステムを作っておいて、このシステムをアジアに押し付けていた時期なのです。

「アジアが協力しないとまらないのに、これはアジアとはあまり……。どうすれば良いのだ」と悩んだ時「アジアはまだ過去の歴史に捕らわれてしまっている。私になにが出来るのかな」と思って「私にはこれが出来るのではないかな」と思ってやったことが、大学に行くことでした。研究所を

やめて一橋大学に行って「歴史を勉強して、これはこうだよ、こうだったねとものごとを明らかにすれば話が出来るのではないか」と。

なぜかと言うと、いまいろいろ議論がありますけれど、歴史的な話になれば、自分のお父さんから聞いた話、自分のおじさんから聞いた話、隣の誰かに聞いた話、学校で教科書に習った話に関して、日本に来てみたら日本人はなにも知らない。それだけではなくて、政府まで「やっていない。そんなことない」と。事実そのものの確定までされていないのです。あった事実が、あったというものにもなっていない。そのことに対して「あるものはあった。それから評価が出来るのではないかな」と思って歴史を勉強するために、一橋大学に入って勉強しました。

何とか博士課程まで進んだのですが、進んでみてものすごくジレンマに陥ったのです。ものごとが明らかになることで「友達になれるかな、相互理解が出来るかな」と思ったら、大間違いでした。先生の前で申し訳ないけれど。学問というのは基本的に理性の話で、正しいかどうかの話で、友情にはならないのです。間違っただけで友情になることはありますけれども、これは正しいものだけです。理性でこれが正しいかどうかを見るのであって、これを見るから「あなたは正しいから、私と親しくなって友達になろう」ということはなかなか。特に事実のことですから。

これで私はなにをすべきだろう。目的は、基本的にアジアが何とか親しくならないとならない。ある意味で、歴史から解放されないとならない。未来志向的にならないと。パートナーにならないといけないというような危機感はあるのです。では私が出来ることは何だ。1人の研究者だから、研究を通してやるかと思ったある日の話です。子どもが、大久保小学校に付いている幼稚園の年長組に通っていたのですが、その時NHKの日米のバレーボールを見ていたのです。そうしたら子どもが日本を応援しているのです。びっくりしました。「お前は日本を応援するの」「そうですよ。なぜ。だって私は日本に住んでいるし、日本人の友達がたくさんいるのだから。日本を応援するのは当たり前でしょ」と言うのです。「パパは」「アメリカ」「だってパパアメリカ嫌いじゃない」。実は私はものすごくアメリカが嫌いです。

1970年代に韓国で、こう言ってもよく分からないと思うけれど、1970年代、皆韓国人が「アメリカ万歳」と言う時に、僕は「アメリカは嫌い」



と言った人間ですから。それと言うのは、1920年代、30年代に、アメリカ人の宣教師が植民地にした朝鮮に来て、どんな悪いことをしたか。それも新聞に出ていることで、なにをしたかを全部新聞から拾って論文を書いた。それが私の卒論です。

だからアメリカはそんなに好きではないのです。子どもが知っていたみたいで「アメリカが嫌いなのに、何でアメリカを応援するんですか」「うん、日本はもっと嫌いだから」。そう話していた時に、子どもの口から意外な話を聞いた。「そんなに日本が嫌いだったら、自分の国に帰ればいいじゃない。何でそんなに嫌いな日本に住んでいるの」と。

返す言葉がなくて。なぜかという、口では「日本と韓国が親しくならないと、友達にならないと、相互理解しないと、我々には未来がないよ。韓国にも未来はないよ。日本にも未来がないよ。100年前に日本が何とか逃れたかもしれませんが、いまは違うよ」と、ずっとあちこちの講演でやっている。近くの中野区の社会教育センターから呼ばれて1回講演をしたことがある。自分だけではなくて、人にも説得し始めた人間が、自分の心は整理されていなかった。

## ニンニク臭いキムチを売る

すごくびっくりして子どもに返す言葉がないから「お前、どの国が一番好きなの」「韓国」「その次は」「日本」。まだそこも納まらなくて「3番目は」と言ったら「中国」と言うのです。「どうして」と言ったら、「だって中華料理がおいしいんだもの」。そこで頭に浮かんだのは、論文ではないのだと。他の先生は違いますけれど、私は論文で書いてなにかをすることではないのだと。「ニンニク臭いキムチ」を日本人に食べさせることによって、友達になれるのではないかという希望が沸いて、その日眠れなかったです。だいたい単純だから。それで私は急に研究者からキムチ屋になったのです。

キムチですが、なぜ私は「ニンニク臭いキムチ」と言ったかと言うと、戦前の日本のたくさんの文書には「植民地をやっているから朝鮮に行きなさい。そこに行ったら非常に住みやすいよ」という紀行文とかがたくさんあります。それがまったく同じく、中国の東北地方に関しても紀行文がたくさんあるし、その後戦後はブラジルに関してもたくさんある。すごく良いような宣伝のプロパガンダみたいなものがたくさんあるのです。その中

に、但し書きが必ずあります。必ずではなくてほとんどにある。「朝鮮はキムチ臭い。ニンニク臭い。それだけが少し問題だ」と但し書きがあったのです。

非常におもしろい文章ですけれども、それを信者協会が出している信者何とかもう忘れましたが、その写真にある人が下関から釜山に行って、釜山からソウル、その時の呼び名は京城で、京城駅に降りたという紀行文です。「京城駅に降りたら、ニンニク臭い、キムチの匂いが漂ってあった」と書いている。少なくともその人は朝鮮の地に入って、その当時からすれば釜山からソウルまで行くのに、丸1日朝鮮にいても、全然キムチが匂わなかったのかな。「朝鮮、京城駅に降りたら……」。その文章に逆に納得が行ったから、私はげらげら笑った。いまからこの道具を持って差別を受けても、もう一回日本人に「友達になろう」と言うことが出来るのではないかとということで、私はキムチ屋を始めました。

でも出来ない。商売をやったこともないし、よく分からない。どうすればいいのかということで、笑わないで。一番初めに行ったのが国会図書館です。国会図書館に行って、韓国料理、韓国食品、キムチと、いくらキーワードを探しても一言も出なかったのです。政治家の名前だけ、北朝鮮とか何とか、私の出身地の悲惨な光州事件とかそんなものはたくさん出ましたけれども、実際にはそれはまったく出なかった。

でも「韓国」というキーワードで探したら、1984年からいくつか生活文化に関するものが少し出始めたのです。それは1945年とか昭和59年、60年、1984、85が日韓関係にとって非常に大事な時期です。それまでの雑誌とか新聞とかマスコミの考え方は「非常に遅れている、野蛮な国」。それもほとんどが「政治的にはものすごい独裁の国」としか書いていない。それが、生活する一般の市民を、一般の国民を、一般の民を映すようになっていると、私は見ました。

もし皆さんが研究したり、資料を見る機会があれば、それは分かると思います。ところが分かったのが良かったのです。まだ良くわからないから、その次にもう一回上野、大阪、名古屋などの在日朝鮮人が集中してたくさん住んでいる所のキムチ屋を回りました。

ある日、大阪に行って一泊して名古屋に行って、成田屋という店を聞き出して、新幹線に乗った。メモを見て非常にびっくりしたものはなにかと

いうと、在日朝鮮人、在日韓国人はキムチ屋を乾物屋というけれど、乾物屋をやりながら、屋号の中にただ一カ所も朝鮮とかコリアが入っているものが私には見つからなかった。韓国政府が、大阪の鶴橋の駅前でやっていた店でさえ「グリーンハウス」、緑のハウスです。「グリーンハウス」とは何だと。

いままで私は日本の差別をなくすことが大事だと思ったのです。でも逆にもう一つ大事なのは、韓国人側の被差別意識ではないか。自分たちは差別されているのだ。それで考えたら差別の現状より、いまの実態よりも差別されている意識はもっと大きいのです。

だから「あなたたちの責任だ」ではなくて、これは例えばトラとかヒョウとかが赤ちゃんの時に、動物の調教師が電気ショックをしたりすれば、一生自分の調教師が自分よりもうんと力が強いのだと思い込む。その過去の経験がずっと積み上げられているのです。だからそちらの責任でもなくて、そんな経験があるからそう思ってしまう。

いまはその部分はほとんどなくなっているにもかかわらず、いまはトラが調教師よりも力が強くなっているにも関わらず、自分が弱いのだと思ひ込むのといっしょで、被差別意識です。この両方をなくさない限り困るのだと思って、その新幹線の中で屋号を決めたのが「韓国広場」です。ハンブルを入れて「韓国広場」にしたのです。

「韓国広場」とは、韓国生活文化の広場ですが、生活文化は長過ぎるから取って生活文化を通してキムチというものは、二つの国民が、民が、市民が親しくなれる道具というのを全部キムチで定義しましょう。それが生活文化だと思って始まったのが「韓国広場」です。

私として出来るのはこれだなと思ってやり始めました。やり始めたら、地元の方がいらっしゃるから、まだそこには誰もいなかったのです。十坪の店が1軒しかなかったのです。食堂として十坪くらいの店が2軒しかない。路地に入ってまた2軒くらいあって、大久保通りに2、3軒あってという時にやっていた時、皆さんは私に「こんなに大きな所になにが出来るんだ」ということで「いや、こんな大きなものをしていいの」と言っていた時に「遠くからお客さんと呼んで、その一部をうちのお客さんにするから」というような、その時は、非常に馬鹿な話が始まって、いまはここまで来ました。

その中でやっているだけに、韓国人が集まり始めました。外の方たちは、ここはある意味では韓国だと思っている部分もあります。それで自分で非常に悩んでいろいろなことをやりました。

## 必要な2つのネットワーク

新宿には外国人が多いから、いろいろな活動が多いのです。特に「共住懇」という素晴らしい形の活動もあります。その中でずっと「でも何か足りないな、何か違うな」と思ったのはなにかと言うと「多文化」とは、日本人、日本社会の立場から見ての「多文化」です。逆の立場の私からすれば、多ではなく一対一なのです。韓国は日本しか他の知識はないのです。隣の中国は摩擦要因とかいろいろなものでもないし。

だから日本人、日本社会から見れば多ですが「これは違うな」と。この地域を街づくりするためには、まず一対一をたくさん積み上げてその立場で多にすべきではないかなというのが私の考えです。いままでそのような議論を、私はどこからも聞いていません。だから今日その部分を、ぜひ話したいと思っています。

2000年度にどこかで提案した話ですけれども、その意味で考えたら「何だ」とすれば、日本人と韓国人といっしょにネットワークを作りましょう。ネットワークを作ることによって、予算がそんなになくとも出来ることはたくさんあるのではないかなと思ったのは、私の考えです。

これは外国人の立場で話しますけど、外国人が日本に来て住むのに三つぐらいのプログラムを持ったネットワークが必要かなと思っています。まずは定着プログラムです。日本に来て、日本語を習いたいという人もいるし、日本語に関しては自然に勉強してきた人もいる。そうでない人もたくさんいます。

私は最初新宿区で喫茶店で座ったら、4度ぐらいの地震があったのです。揺れたり何かするのが楽しくて。もうちょっと揺れないかなと思ったのです。そのぐらい危機感がなかったのです。本当ですよ。楽しかったのです。「わー、初めてだ」という、初めて体験するあの好奇心で興奮した。いまは怖くてしょうがないけど。韓国に来た人にこのぐらい防災に関して認識があるかという、まったくないのです。

このように防災とか日本語とか生活習慣も相当違います。でも顔が似て

いたりすると、いっしょだなと思ってしまう。地域参加の在り方もそうですけれど、いろいろな部分で「とにかくプログラムで韓国人といっしょに一つのネットワークを作りましょう」というものです。

ケアプログラムというのは、子育て、教育、病気、事故といったいろいろな所に……。実際に病気になった時、日本語が出来ない韓国人は病院には行けない。怖いんだもの。言葉が通じないというのは、半分ぐらいは先生の話聞いて治すけれど、どこがどう痛いのだ、どこがどうだと説明することが良く出来ないのです。だから非常に都合が悪い。行って来ても治ったという感じもしないし、自分の病気に納得が行かない。病院に行かなくて、結局は病気を大きくして死んだ人もいる。

私は約4、5年間、韓国人の中で日本に縁故がなくて、関係者がいない人のために、韓国大使館と組んで葬式をやってあげたことがあります。ほとんど半分以上は早めに病院に行ったり何とかしていたら、ちゃんと治したと思うのです。でも、病気を育てて大きくしてしまう。そんな部分も、何とかネットワークがあれば、隣の誰か韓国人に「ちょっといっしょに行ける」と、1人は「今日は難しい」と言うかもしれないけれど、4、5人いればその中に1人ぐらいはいっしょに行ける人が出るでしょう。そのような話です。

葬式もそうです。韓国人はもしここで誰かが亡くなった時、韓国から来ると必ずそのままいっしょに行きたいと言う。なにも知らないから。なぜかというと、そのまま飛行機に乗せて行けると思ったのです。でも、全然違う。そのようにいろいろとお願いしてネットワークを持ってノウハウがあれば、非常に良い。例えば日本語が全然出来ない。知人もいない。なにも分からない。火葬許可を得ないとならない。大変なことがあるから、1週間くらいかかってしまうのです。でも私たちがここで前もってきちんと役割分担すれば1泊2日で、だいたい解決出来る。そのような話です。

サポートもいっしょです。行政サービスになにがあるかとか、分からない。やってもきちんと出来ない。法律上怖くて行けない。高いだろうと思って、言葉も出来ないし。税務申告をしない人の中で、やり方とかどうすれば良いかとか知らなくてやらないという人が半分ぐらいいるかもしれません。少なくとも私の感じではそうです。そのような形で、このような部分にプログラムを持てば良いのではないかというのが私の考えです。

次に「街づくりのビジョン」についてです。私はずっと「コリアンタウン」とは呼ばれたくなかった。ずっとそれを拒んだと言った方が良いでしょう。なぜかと言うと、2000年までには日本のマスコミが新宿を取材する時には、私たちの所に先に来て「誰か紹介してくれ」という話がほとんどだったのです。

その時、必ず言うのが「“コリアンタウン”と叫ばないでくれ。1割もいない韓国人のために“コリアンタウン”と呼ぶことによって、9割以上の日本人が見えなくなるよ」と。これは日本人に対しても差別ですし「この街の発展にも絶対に良くないよ」という話をずっと続けたのだけど、2000年以後日韓ワールドカップの時から、どこにでも行けるようになって情報がたくさんあるから、私のところには誰も来なくなって「コリアンタウン」という言葉がいろいろ出始めたのです。これは姿勢の話です。呼ばれるとか呼ばれないとかという問題ではなくて、呼ばれない気持ちを持ってお互いに接することが、姿勢として協力し易くなったり、協力出来るようになる。そうならないと困るとというのが私の考えです。

## 韓国体験できる街

「そうでなかったら、どうしますか」と。そして「韓国体験の街にしましょう」という話を私はしました。最初、私はここで自分1人で仕事をしながら、一つのプロジェクトネームを決めたのですが、初めは「ウィンドウ、窓」でした。日本人に対して、日本に向けて開いている韓国の窓。「この穴を通してこの窓を通して韓国を覗いて見てください」ということで「窓」です。その次は「場」だったのです。

「場」というものは、この場で体験しましょう。その意味での韓国体験が出来るような街にしたい。私がやっている「高麗」とかいくつかの店を見ていけば「ここは韓国かなと錯覚するように、体験をしていただきたいという気持ちです。

「コリアンタウン」と呼ばなくなるというのには、実は二つの意味があるのです。一つは生活レベルで地元の人とどうすれば協力出来るのだ。呼ばなくなったら、そこが壁になってしまう。だから地元の方たちといっしょに協力し合えるための一つの基盤作りのためにも呼ばれたくないというのが一つあります。

それと「体験の街」の意味はなにかと言うと、この地域の活性化です。どの地域でも例えばいま、私たちがいくら生活レベルから考えたら「コリアンタウン」と呼ばれたら困ると言っても、外から呼び始めています。これが現実です。この現実とこの条件をプラスに活かせるか、ただ否定し続けるかすれば、いまはプラスに転じてそれを活かすべきだと思うのです。

去年の私たちの簡単な統計では、2004年に新宿のこの地域を訪ねた外から訪ねて来た日本人の数が約300万人です。これは根拠があるけど、言いにくい部分があって言いません。ある意味で観光資源です。この資源をどう活かすかということもあります。

いまの私の考えは、体験する「場」で終わるのではなくて、日本と韓国を交流する一つの玄関口としてここを作り上げたい。まず生活の交流がすでにあります。文化の交流も始めています。私は始めた段階だと思います。まだ弱いけれど、ビジネスでの経済的な交流もいま芽生えています。こちらの地域を活用すべきではないかなと思っています。

そのために今日は一つの問題提起として、日本と韓国、日韓共生(共栄)協議会(仮)のような、とにかく地元の日本人と最近来た韓国人がまずは「力を合わせて何とかしましょう」という協議会などをして、ざっくばらんに話が出来れば。それに仕事をいっしょにすれば、この街はいま韓国人がたくさん来ていることを活かせるのではないか。この例を見て、もう一回中国人だけでなく他の国々の人にも広げる。それで真の意味での「多文化共生」「多文化共栄」が出来るのではないかなと思って、私は問題提起したいと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

司会——ありがとうございました。ここで15分の休憩にいたします。ご記入いただいた質問表は、この後のパネルディスカッションに使わせていただきます。赤いバッジを付けているスタッフにお渡しください。

それから本日、会場の後ろにお水といっしょに韓国伝統茶が用意してありますので、ぜひお試してください。質問はもうございませんでしょうか。ありましたらスタッフのほうへお願いいたします。

(休憩)

司会——それでは、パネルディスカッションを始めたいと思います。  
コーディネーターは(財)新宿文化・国際交流財団国際交流担当課長の柳田  
富美子さんです。柳田さん、お願いいたします。





# パネル ディスカッション

パネリスト：

三澤治男 大久保いぶき町会副会長

植木康次郎 大久保いぶき町会環境衛生部長

金根熙（キム・クンヒ）（株）韓国広場社長

森田忠幸 新大久保商店街振興組合理事長

金世煥（キム・セファン） 在日本韓国人連合会事務次長

李承珉（イー・スンミン） 新大久保語学院院長

小倉紀藏 東海大学助教授

小柳俊彦 新宿区企画課長

コーディネーター；

柳田富美子（財）新宿文化・国際交流財団国際交流担当課長

柳田——よろしく願いいたします。では早速でございますが、皆さまの中で新宿にお住まいの方はどれくらいいらっしゃいますでしょうか。ちょっと挙手をお願いいたします。はい、ありがとうございます。半数近くの方ですかね。

それから最近、韓国ドラマですとか韓国映画をご覧になった方、いらっしゃいますか。これも挙手をお願いします。あー、すごく多いですね。もう一つ答えてください。この中で韓国にいらっしゃったことのある方、挙手をお願いします。あ、これも結構いらっしゃいますね。韓国が近くなっているのだなということが分かるようで、先ほどの小倉さんの「ルック韓国」が少しずつ進んでいるのかなという気がいたします。

では前半の基調発言にもありましたように、日本では昨年辺りから「韓流ブーム」に沸いております。韓国がぐっと近くなったような気がいたします。いろいろな形で文化に導かれる形で、これまでになく良い空気が出来て来ているのかなという気がいたします。

国レベルでは先ほどのお話でもありましたように、いろいろな課題がたくさんございますが、本日は街づくりという観点から、生活住民レベル、

つまり個人個人として新宿の街を考える。率直で前向きなディスカッションにして行きたいと思いますので、パネリストの皆さまよろしく願いいたします。

最初に自己紹介を兼ねまして、簡単に本日のディスカッションへの意気込みと自己紹介をお願いしたいと思います。行政は後ということで、植木さんからお願い出来ますか。

植木—— 私は大久保一丁目に住んでおります植木康次郎と申します。新宿の街に57年住まわしていただいております。新宿の街に私は育てられて参りました。数年前会社をリタイアしましたので、新宿の街に少しでも恩返しが出来ればと思い、様々な取り組みをさせていただきました。

今日は私たちの住む街の環境美化への取り組みについて、後ほどプロジェクターを使って報告させていただきたく思っております。私の心情としては、外国人の皆さまと小さな行動を起し、行政と共同でものごとを進められればと思っております。

柳田—— 植木さんは大久保いぶき町会で大変積極的に活動していらっしゃる方でございます。続きまして、新大久保語学院を運営されています李承珉（イー・スンミン）さん、お願いいたします。

## 韓国のナショナリズム教育

李—— アンニョン ハセヨ。カムサ ハムニダ。私はいまから9年前の1996年に、留学生として韓国から参りました。日本に来る前には、私もちよつと古い世代に含まれて反日教育を受けた者なので、日本には良くない感情があったまま日本に来たのです。しかし、住んでみれば、韓国でのナショナリズムの教育がすでにすごく嘘が含まれていたということを感じました。私は向こうに30年住んでいて、留学生として初めに日本に住んだ時の1年間は、私には韓国では感じない幸せをすごく受けた経験を持っています。

私の場合は日本に来てすごく良い感情を持つようになって、いまは韓国で一番嫌われる親日派の1人になっています。先ほど小倉先生も政治的な話だったのですが、島根県の「竹島の日」の設定ということをお願いいたします。島根県の「竹島の日」の設定が連続してありがたいことではないかと思っております。

というのは、最近ヨン様を始めとして、韓国人の俳優や韓国人、韓国の文化が好きになって、すごく熱狂していらっしゃる日本人の方が大勢いらっしゃいます。さらに最近は島根県で、竹島という韓国の独島ですけれども韓国の領土を愛して、愛して、その日を設定したと私は勝手に解釈しております。

それでちょっと政治的な話は放っておきたいのです。韓国側は民間になれば、韓国でも「独島の日」とかを、地方自治体が設定すれば良いと思うわけです。ここはやはり政治的なことはなるべく排除していただいて、私が新宿の住民の1人として、住民の立場になって話しさせていただきたいと思えます。

申し訳ないですけど自己紹介がずれました。1年半ぐらい日本語学校で日本語を勉強しました。続いて大学院に進んで政治学の中で地方自治を主に専攻しました。韓国から日本に来る時には、日本で勉強して博士まで取って韓国にまた帰るつもりだったのです。やはり日本が好きになって日本で長く住むためには、日本での生計を立てる。そういう仕事をしたいという気持ちになったわけです。

修士を卒業した後、ちょうどワールドカップの時期だったのですが、ワールドカップで日韓がすごく親しみを感じるようになった。まだ韓国語というのが一般の語学として授業として認められない時期だったのですけれども、きっと日韓が親しくなる。もっと親しくなる中で、言葉の勉強というのは必ず需要があると思ひまして、韓国語学校を開くようになりました。

いま3年目になるのですがそれでも、幸い去年ヨン様を中心とした「韓流ブーム」が起こってすごく繁盛しております。特に去年、「韓流ブーム」がピークの時には毎月50人ずつ生徒さんが入って、すごく大きくなったのです。それでこんな私には縁のない所で皆さんと議論するようになったと思うのです。後ほど新宿の現状と新宿の未来について1人の外国人住民としていろいろ発言させていただきたいと思ひます。よろしくお願ひします。

柳田——続きまして、大久保いぶき町会副会長の三澤さんです。よろしくお願ひします。

三澤——皆さま、こんにちは。私は1932年に大久保で生まれ、大久保で愛着を持って現在まで生活をしている人間でございます。一時不幸な時

代に街は廃墟してしまいまして、私たちの先代が努力してこの街の基盤を築いてくれたわけでございます。そういった歴史の中で、平和な新しい街に皆さま方といっしょに行動を共にして進む。そういう一つの仕事としてご協力して「誰もが安心して暮らせる街へ」というタイトルを作りまして、皆さんといっしょに協議をしたいと感じております。自己表現が下手でございますが、何とぞよろしく願いいたします。

柳田——次に先ほども基調発言をいただきました「韓国広場」の金根熙さんです。

金根熙——30分も話してまた話せと。でも私は話しするのが大好きだから自分に与えられた3分は話します。

私は1956年生まれですけれども、実は54年の午年です。戦争の中でなにか間違ったか、父が後で直すチャンスはあったけれど、そのまま放っておいたみたいで、二つ間違っただけでそのお蔭で日本の大学で奨学金を得られるようになりました。「30歳以上はだめだ」と言っていたのに、ちょうど2年も違うから楽に56年の卒に入って、30何歳だったか奨学金を得て勉強した。非常に恵まれています。

## 日本に「恩返し」

日本に来て、日本の政府関係の団体にも勤めたし、国立大学でしかも全然勉強もしないやつに日本が奨学金を出して、勉強させてしまった。結局私は残って恩返しをするつもりで、いま在るのです。

「恩返し」という言葉を初めに使ったのは、弊社の税理士に言っていた話です。私は恩返しをするつもりですから、ちょっとの灰色も白に限りなく近い灰色もいやだとはっきり言いました。なぜかと言うと、私は恩返しをするつもりだから、会社は利益が良いかどうか、税金をたくさん払ったのです。

そうしたら、税務署から「こんなにたくさん税金を払っているのは、なにか隠しているものがあるだろう」と言われた時、すごく怒りました。「ではどうぞ勝手に」ということで、30人が3日間ぐらいつと隅々まで調べて、結局出たのは私がやっている食堂で食べたものをサインしていたのですが、それをうちの社員たちが売り上げに入れていたのではなくて、没にしてしまったのです。その分とか、2月14日を3月14日に間違えてい

たとかそんな指摘を受けました。けれども他はほとんどなくて、税務署の部長か誰かに呼ばれて、ある意味で激励の言葉をいただいたこともあります。

私が日本で生きている一つは、恩返しをしなくてはならないなど。なぜかと言うと、日本が私にチャンスを与えた国だからということが一つ。もう一つは、自分を産んでここまで育ててくれた自分の国、自分の民族に関する感謝の気持ちもいっぱいです。

というのは、私はそこからだから。私がいなかったら、相手もいないのです。私が韓国人でなければ、日韓の問題に悩む何の理由もないし、それのために汗を流す何の理由もないのです。だから自分を産んでくれて育ててくれた国と民族に対する感謝の気持ちもあって、いま話したものが自分の使命感という意味でのミッションとしてやっています。

だからこれは、一生続けるだろうと思います。人間は50になって急にミッションが変わったり、考え方が変わることはほとんどないと思いますから、続けると思います。他はずっと自分の話を言い過ぎたぐらいに言ってしまいましたから、私の紹介に兼ねてお話しさせていただきました。

柳田——はい、そのお隣は、新大久保商店街振興組合理事長の森田さんです。

森田——皆さん、こんにちは。「新大久保商店街振興組合」という長い名前の商店街から参りました森田と申します。私は先ほど自己紹介がありました植木さんや三澤さんと同じように、この大久保で昭和26年に生まれました。地元でない方は分からないのですが、明治通りに日赤産院という病院があります。この地域はそこで生まれた人がたくさんいます。いまはもうその病院はないのですが、そこで生まれまして大久保で育ちました。植木さんも先ほど言われていましたけれども、この街で育てられたという大変強い意識を持っております。

大久保通り、新大久保から明治通りまでの600mの商店街があるのですけれど、その真ん中辺りで、化粧品と小間物を扱う店を親父がやっております、私は言わばその二代目という形で、ここで商売をさせていただいています。いま一番下の子どもはこの地域の公立の大久保小学校に5年生で通わせていただいております。

現在、私は「新大久保商店街振興組合」のいちおう理事長ということで、

役職を持たされております。今日は大久保で生まれ育った日本人として、日々感じていることをなるべく率直にお話しさせていただこうと考えています。パネラーの韓国の方々にはちょっと不愉快な言葉も出て来るかもしれませんが、その先にあることが大事だと考えております。もし失礼があったら、先にちょっとお話しさせていただきたいと思います。

基本的には、いまの現状を踏まえてこれからどういうふうにしていったら良いのかということをごさまで伝えたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

柳田——はい、森田さんの右側は韓人会の金世煥(キム・セファン)さんです。

金世煥——皆さん、こんにちは。私は韓会在日本韓国人連合会事務局の事務次長でございます。いまから7年前の1998年に、留学生として韓国の釜山から参りました。1年ぐらい日本語の学校に通って、もう1年は日本大学の博士課程に研究生として入ったのです。韓国では大学院を出て銀行マンとして7年ぐらい勤めて、こちらに来たわけです。今年やっと博士を取って、帰ろうと……思っていないのです。(笑)

こちらでずっと住むつもりでおりますし、韓人会のボランティア組織でもいっしょです。より一層頑張りたいと思いますので、よろしく申し上げます。

柳田——はい、引き続きまして、本日貴重な基調発言をいただきました小倉さんです。

小倉——こんにちは。私は先ほどお話ししましたので、特別いまの機会にはお話ししないようにします。もっと皆さまの白熱した議論のほうに時間を取りたいと思います。先ほどこのシンポジウムが始まる前に皆さんと昼食を摂ったのですが、もうその時から議論はかなり白熱しておりまして、これは大変なことになるなと思っていますのです。

でも私も外部の人間として率直な話を本当にお聞きしたいのです。「仲良くして行けば良いんだよ」という話ではなくて、どんな問題があって、どんな摩擦があって、どういうふうに対処しようとして行くのかという話をぜひとも伺いたいと思っています。

柳田——はい、ではこちらに戻りまして、パネリスト、一番左側は新宿区の企画課長の小柳さんです。

## 新宿区に平和国際交流部署

小柳——こんにちは。新宿区役所の企画の小柳と申します。実は新宿区役所は国際といいますか、外国人の方との接点につきましては、平成元年1989年ですが、平和国際交流担当というのが総務部に出来ました。その時、私もその一員だったのでございます。その時はどちらかと言いますと都市交流、いわゆる友好都市提携の関係が多かったですね。それで国際という名前が初めて新宿区区役所の中に出来ました。そういう関係でいろいろな情報が入るようになりました。

私どもの一番最初の考え方は平和事業、それから都市間国際交流ということでした。しかしこれでは、なかなか区の中で問題があるにも関わらず、なにも出来ていない。そこで私どもが最初に考えたのはいわゆる相談コーナー。それから広報紙。3カ国語による生活情報誌とか相談とか。たまたま私はその前に広報課におりましたので、そういう一つの経験と言うか手法といったものをまずここで使ったらどうだろうかということで始めた経過がございました。

これについては若干反省もございます。その反省の一つは、誰に対してそういう情報を発信するかということについて、まだ十分に私どもも理解していなかったということもございます。

それからもう一つ、その当時都市交流を行いました、その時の都市交流というのは、最初に文化という一つのテーマがございました。小泉八雲が生まれたギリシアのレフカダ町、それから大久保のいま小泉公園がありますが、あちらのほうで亡くなられた。この縁でギリシアとの関係。それと後、ドイツのベルリンのティアガルデン。その前にロンドンのランベスともちょっと交流しようということで、これは夏目漱石の関係であったのです。それから後、中国の北京市東城区、このような所と都市交流をやっていました。ただその時にやっぱり問題意識としてあったのは、なぜ隣の韓国とはやらないのかと。これは確かに私のほうにも問題意識としてはありました。

そういう中で、89年から3カ年ほどおりました。その時一つ提案した中で、アンケート。例えば大久保もそうですが、いろいろ地域の中で暮らす外国人の方との接点、そういったものについてのアンケートをやりましょうということでアンケート調査を当時やりました。これは今回平成15年

にもう1度、外国人の方、日本人の方を含めた調査をやっております。それとはまた大分違ったような経過がございます。これについてはまた後でお話しする機会があれば話をしたいと思います。

それともう一つ、その時にいわゆる自治体だけではなくて、もっと第三者的な財団として国際交流協会を創ったわけです。当時そう提言していました。それが平成5年、93年に国際交流協会となりました。

国際交流協会はまた縁がありまして、私も平成8年から3年間在籍しておりました。経過だけを申し上げますと、その国際交流協会が平成11年にいまの文化国際交流財団に衣替えをして、文化と国際交流を結びつけたような形の、よりそういう活動を広げるという意味合いを込めて、財団が創られました。

ただこの間区として、いわゆる基本的に行政の課題として、外国人の方と共生する。そういう視点で、ものを見るセクションがなかった。財団はありましたが、区の組織の中に「国際」という名前が付いたものは「平和国際」というのはあったのですが、それが平成9年になくなって、それ以降そういう分野がはっきりした形では出て来なかった。例えば地域振興課とかそういう所が、ある一定の役割を果たすのですが、専門的な分野ではなかった。

そういうこともありまして、今度平成17年4月に「文化国際課」というセクションを設けるということで、まさに先ほど区長も申し上げましたが「多文化共生」を一つのテーマとして、積極的に新宿区も取り組もうということで、いま取り組んでいるところでございます。

いま私のセクションは、計画を作るセクションでございます。17年から18、19と3カ年の自主計画をいま回覧いたしております。そういう中にも文化、観光、多文化共生、こういうものを発信して行こうということ、従来とは違ってかなり強く打ち出しています。そういった意味では、これから皆さま方のほうで議論になると思います。そういう視点でも行政として関わって参りたいと思いますので、よろしくお願いたします。

柳田——本日はこのようなメンバーでお話を進めて行きたいと思えます。それに合わせまして、会場に今日お越しくございました大勢の皆さまにも、発言者として参加者としても加わっていただきたいと思えます。



先ほどの休憩時間にいただきましたご意見、ご質問の中から2、3まず最初に本日のテーマは「新宿のこれから未来に向けての街づくり」ということです。その前提として先ほどから度々出て来ていますキーワードの一つ「韓流ブーム」についてちょっとお話を会場からお聞きしたいと思いません。

いただいておりますのが1つ、飯島さんです。——「1週間に1度、韓国語を習い始めました。授業の後も大久保通り職安通りへ出かけては、いろいろとお店を見て歩いています。エネルギーのある街で元気をもらっています」——というお勉強をしていらっしゃる方です。飯島さんいらっしゃいますか。はい。もうちょっと詳しいお話をさせていただいてよろしいですか。

## 韓流俳優に心ときめかせ韓国語を

飯島——アンニョンハセヨ。チョヌン飯島ユリコラゴハムニダ。今年の1月から韓国語を勉強し始めました。韓国映画が好きで、ドラマが好きで、俳優さんを見ると「キャー」と言っは心ときめかせています。

新大久保語学院で勉強を始めたのですが、決めたポイントはやはり新大久保という土地にあるということです。見学をしに伺った時、私は方向音痴なものですから、2人の方に道を尋ねたのです。そうしたら仕事にも関わらず「そこの道を右に行って、左に行って」と詳しく教えていただきました。そのお2人の対応で、すっかり新宿という街が気に入ってしまい、いまでは週1回語学学校に行っているのです。その授業が終わる度、お店に出かけてはいろいろグッズを見て、楽しんでます。この「好きだ」という気持ちを大切にしたいと思っています。以上です。

柳田——はい、どうもありがとうございます。ここで、小倉さんに「韓流ブーム」について、全般的なことと言いますか、一般的なことでも良いのですが、全体を少しお話いただけますでしょうか。

小倉——「韓流ブーム」についてですか。ハハハ。突然ですけども「韓流ブーム」は素晴らしいですね。本当に私は全肯定しています。これに対して、ちょっとやや否定的な見方をされる方もいらっしゃるし、いまでもいらっしゃるのです。つまり日本人が韓国というものに向き合う時、歴史の認識の問題ですとか、在日の韓国人の方ですとか、これはニューカ

マーではない、もともといらっしやった在日の方です。

「そういうような問題を抜きにして、ただミーハー的にキヤーキヤー、韓国の映画ですとか俳優さんですとか、そういうものに熱狂している。それはおかしいのではないかと、そういうふうになんかちょっと否定的に見ていらっしやる方もいらっしやるのです。けれども私はそういう見方はまったくしないで、非常に間口が広がったということで、非常に素晴らしいと思っています。

今日もお話に出て来るかもしれませんがけれども、私は基本的には日本では、小学生や中学生の段階から韓国語を教えるという所までは行かなくても良いかもしれませんが、韓国語に触れる。特に韓国語、中国語ですね。そういうものに触れる機会をもっと与えたほうが良いと思っています。

共生といった場合、お隣の国との人口の移動というのはやっぱり一番多くなるわけですので、そういう意味でもっと共生するためには、心の問題だけではなくて、実際にどうやってコミュニケーションするかとか、あるいはコミュニケーションするためにどうやって相手の人の生活習慣とかそういうものを知って行くか、教育という場でやるためには、やっぱり予算が必要だと思うのです。そういう心構えだけではなくて、実際の制度を整えて行くためには我々はどうやって取り組むべきかと、そういう所が重要だと思います。

## 韓国にあこがれ、知りたい強烈な意識

「韓流ブーム」は、そういう所まで我々を引っ張って来たと思いますよ。ですから、私としては非常に第一歩が始まったと。もちろん在日の方がずっと日本と韓国の架け橋をして来られたし、80年代には第一次韓国ブームがあったのですけれども、これほど多くの日本人が韓国に憧れを持ちたり、あるいは知りたいという強烈な意識を持ちたりしたのは、これが初めてだと思います。ここから初めて日韓の共生が始まるのではないかと私は非常に高く評価しております。

柳田——「韓流ブーム」の位置づけから展望まで、一言で深いお話をいただいたような気がいたします。では翻って、今日の実際のテーマであります街づくりの中で、主役は誰かといいますと、そこに住み、働いている

住民、あるいは事業者の皆さんだと思うのです。その人たちがこれから実際に取り組んで行く。引っ張って行く方々ですけれども、今日はその部分を深めて行くお話をして行きたいと思います。

地元住民と言いましても、先ほど三澤さんのほうからお話がありましたように、ここで生まれ育って、お仕事を続けていらっしゃる方々の思いというものもあると思います。それから、この新宿の街にやって来て頑張っ仕事や事業をしていらっしゃる方の思いというものもあるので、その辺を少し両方聞いてみたいと思います。

三澤さん、いかがでしょうか。「韓流ブーム」も踏まえて、地元住民としていま大久保の街、新宿の街には、韓国人を含めた外国人の方が大変多いのですけれども、どういうふうに見ていらっしゃいますか。

## いぶき町は44%が外国人

三澤——私の街として、いぶき町会という町でございます。現在、外国人の方が44%居住しておられるのでございます。日本人が56%。新宿区全体で10%です。そういう所で現在町会業務とか、日常の仕事と言いましようか、いかに地域社会が良くなるかというようなことを町会として指針を立てて、皆さんといっしょに考えている時でございます。

この44%という人たちが住民としての意識があるのかないのか、我々といっしょに街で共生して行く場合に、やっぱりいまいらっしゃる外人の方のリーダー、いわゆる事業をやっている方々のその社長さんとか、そういう方々がこの街の中に溶け込んで情報の発信基地として我々と交流していただきたい。このように非常に強く思う次第でございます。そんな考えでますます外国の方といっしょに暮らさなくてはならないということを肝に銘じて、町会業務に全力を尽くしているという現在でございます。以上話が分かりませんが、そういう形まで進んでおります。以上です。

柳田——はい、ありがとうございます。先ほど森田さんからも伝えたいお気持ちがあるということでしたが、いかがでしょう。

森田——さっき、金社長のほうからも「コリアンタウン」という言葉についてのお話がありました。実は私も商店街で仕事をしているということで、マスコミ関係の取材も多々受けることがあります。その時、韓国の方が増えてワールドカップ以降、大久保が韓国人の人が多いうことが認

知され始めてからの取材の多くは、「新大久保商店街の理事長さんですよね」「はい、そうです。“コリアタウン”について伺いたいのですけれど」。切り口はほぼ100%そういう形で取材が入って来ます。

私はその時に必ずどの方にも申し上げているのですけれども「何で“コリアタウン”なのですか」とお聞きするのです。まずそこで、聞き手の方が「えっ、当たり前じゃん」みたいな感じで、まず「何でそんなことを聞くの」という感じになりますね。もちろん、韓国の方がお店も多いし、人も多い。だけど、他の国の人たちもたくさんいるのです。大久保地域は、韓国の方も含めていろいろな国の方が実は生活をしています。「もちろん日本人が一番多く住んでいるんですよ」と言うと、何か出鼻をくじかれたみたいな形になるのです。

## 地元で感じる違和感

実はそれは私の正直な気持ちなのです。例えば先ほど会場の方も「大久保が大好きになりました」というご発言がありました。例えばJR新大久保駅を降りて、初めて大久保に行ってみようと思って新大久保の駅を降りられた方が、やっぱり最初びっくりすると思うのです。日本語が聞こえない。何か聞き慣れない言葉が、どんどん飛び交って同じような顔をしているのに、ハングルの看板はあるし「ここはどこ、私は誰」みたいなそういう感じになるのだろうなというのは、よく分かります。

ただ、そういうことは外側から見た大久保の街の姿です。この街は先ほど三澤さんの自己紹介の中にもありましたけれど、古い街で歴史もありますし文化もあります。私たちの先輩たちがずっと築いてきた街です。そういう街に「日本じゃないみたい」みたいな感じで入って来られる日本の方々に対して、私たち住民はちょっと複雑な気持ちになることもあります。

特にここ数年、韓国の方が非常に増えて来ているし、入れ替わりも実は激しいのです。ずっと同じ方がここに住んでいる方ももちろんいらっしゃるし、それから「全然日本語が分からないし」という方々もこの街にたくさんいらっしゃいます。そういう時に、私どもは店をやっておりますので、お客様として接客する機会も大変多いです。

そうすると、私の店に例えばポーンと入って来て、韓国語でダーッとお

話をされる方が何人もいらっしゃいます。「あ、ごめんね。韓国語よく分からないのですよ」と言うと、いろいろな反応があります。「あ、ごめんなさい」と言う韓国の方も多いです。それから「えっ、韓国人じゃないんだ」と思って意外な顔をして出て行かれる方も多いです。

それから「言葉が良く分からないのですよ」と言うと「フン」とそのまま帰ってしまう人もいます。つまりいろいろな人がいます。その時に私はちょっと正直不愉快な気持ちになるのです。「ここは日本なのだから、日本語しゃべれよ」という気持ちがどうしても出て来ます。

なぜそう感じるのかということをお伝えしたいのです。何でそういうことを言われた時、僕は不愉快に感じてしまうのだろう。それは、たぶん今日会場に見えている皆さんにも故郷があると思うのです。自分の生まれ育った街というのが必ずあります。故郷というのは、もう絶対に帰りたくないという故郷かもしれないし、早く帰りたいという故郷かもしれない。でも故郷は故郷でこの現実には動かないのです。この大久保という街は、私にとっては故郷なのです。そういう街に、私たちの先輩たちがずっと培って来たこういう地域社会という中に異質なものがどっと入って来たわけです。

どっと入って来て、ごめんなさいね…、わがもの顔で振る舞われてしまうと、いらだちと違和感を感じます。もうちょっと強く言ってしまうと、ちょっとごめんなさいね。怒らないで聞いてほしいのですけれど、あえて言いますと、自分の家に土足で入り込まれたような感じになるんですよ。

ところが本当はここが大事なのですけれど、例えば金さんや李さんや今日パネラーになっている方々と私たちはよく会います。ふつうに全然違和感なくお話をします。だから、日常的にふつうなんです。ふつうのことはあまり記憶に残らないんですよ。

そうではなくて、自分をいらだたせたり違和感を感じさせること、そういうことが、先ほどどなたかのお話がありましたけれども、積み重なって行くことがその国の人の評価になってしまう自分をある日突然発見するのです。「あ、これはまずい」と。例えば皆さんが新大久保の駅を降りられて「日本じゃないみたい」と感じる方がたくさんいらっしゃいます。でも、本当は日本の人がたくさんいるわけです。ただそこで日本語で話されている言葉はほとんど聞こえないのです。ふだん自分が使っている言葉

で当たり前だから。

そうではないものに人間の耳は反応するわけです。「あ、聞いたことない言葉が流れている」。そういう形で、そうではないものに関して人間は反応する所があります。ふつうにこの街で暮らしている韓国の方々、日本を良く知っていて日本の生活も良く分かっていてそれに合わせて生活をしている方々は、私たちはふつうに付き合っているので気が付かないのです。ふつうだから。ふつうは気が付かないのです。ふつうではないことをする人はもうピンピン跳ね返って来るわけです。

それに対して、私たち地元の住民が非常に違和感を感じていることをちゃんと理解しておかないといけないと思います。たぶん、そういうふうには違和感を感じたりするのは、この街にもともと住んでいらっしゃるほとんどの方が感じている偽らざる気持ちなのではないかなと僕は感じています。先ほどから「韓流ブーム」の話がありましたけど、「韓流ブーム」に一番乗り遅れているのは、大久保の日本人だと思っています。

それは、やはり現実というのかな。実際に生活をするうえで、韓国の方と日本人の間のももの考え方の違いだとかいうことが日々、積み重なって行く中で生活をしていますから、そういう状況になるのだと思うのです。

ただやはり問題なのは、そういうふうを感じるのが、実は韓国の方すべてに対してそう感じているのではないということです。それがすごく僕は大事な問題だと思うのです。例えば日本人にも悪いことをする人はたくさんいます。皆が良い人ばかりではない。韓国の中だって良い人がたくさんいるし、そうではない方ももちろんいるのが当たり前なのです。

そういうことを私たち日本人側が、ある程度懐を深くして受け入れて行くという気持ちにならないといけないのです。そのことに、この地域に住んでいると気付かされるということをまずお話ししたいと思いました。

柳田——ありがとうございます。ずいぶん率直なお気持ちを語っていただきました。ただ、率直な本音の部分が聞けてこそ初めて直接に話し合うという場になって行くのだと思います。これが先につながれば良いのだと思うので、前向きにとらえていただきたいと思います。植木さんいかがでしょう。

植木——私がいま感じていることを言います。「私の周りに外国人の住んでいる割合が先ほど三澤さんがおっしゃったように44%強ですよ」という

お話をしていますけれども、私の実感からしますと60%を超えている。そんな実感があります。それで私はもうネイティブジャパンなのだ。日本人としてはっきりものを言わなきゃだめな時が来てしまった。はっきりものを言う時には、なにを言おうか。やっぱり人間として一対一で話しをして、ものを分かっていたいただきたい。

## 外国語の人が吸殻を捨てると腹が立つ

例えばたばこのポイ捨てをする。日本人もやります。それも先ほど森田さんが言っていましたように、日本人がやっているとそんなに気が付かないのです。私の周りには大久保小学校というのがあるのですが、あそこには10カ国の国旗があって、これだけの人が通っていましたよ。いま現在も通っているのかもしれませんが。

そうすると、我々日本人が10カ国の言葉なんか勉強出来ませんよ。ここは日本なのだし、東京の新宿なので、日本語でものを考えて。そうした時に、外国の言葉をしゃべっている人がたばこを道路に捨てると、すごく腹が立つのです。昨日もおとといもあったのですが「あなたは自分の本国でそれをやりますか。やらないでしょう。ちゃんとたばこを拾って、あそこの灰皿へ入れてください」。こういうような声をかけるようにいま心掛けています。これが私のいま感じている本音の部分です。

柳田——いろいろな形での本音のご意見をいただきました。では新宿に入って来て、事業あるいは仕事をしていらっしゃる皆さまの意見も聞きたいと思います。李さん、いかがでしょうか。

李——私の場合は、大学院を卒業してこの事業をやる前にカナダで8カ月間語学勉強に行ったことがあるのです。すでに日本で5年ぐらい住んでカナダに住んだ時、すごく苦勞した時、あるいは寂しい時に一番帰りたい所が韓国ではなくて日本でした。食べ物も、キムチよりも寿司が食べたい。カナダでの日本食はすごく高いのですけれども、そういう所に行って寿司を食べたりしたのです。

私の場合、日本で事業をやろうと思った時、すでに6年ぐらい住んでいた時ですけども、日本で事業をやろうと思った時には韓国でやるよりは、必ず自分としては易しいかもしれない。つまり日本人はすごく正直です。真面目で信用さえあれば通じる。そういうふうにしてその時までずっと思っ

いたのです。

しかし、韓国では必ずしもそうではない。お金が大事で、お金がなければ事業を起すのはすごく難しい。しかし日本では一生懸命やれば出来る。そう思ったので、日本で事業をやりました。基本的に私は日本が好き。そしてこの街が好きと考えたうえで、日本人の住民の方々が我々に投げかけたいろいろなことに関してちょっとコメントをさせていただきたいと思います。

とりあえず住民意識があるかどうかという三澤さんの投げかけです。私はこう思っています。街は誰のものかと考えれば答えがないのだと。街はすでに生きるもの。そして街は変化するものだと思います。大久保もすでに変化しています。多くの外国人が大久保に入って住んで定着しています。

どうして外国人が大久保にそんなに住んでいるのかというと、やはり外国人として住み易い所があると思うのです。そういう環境を創ったものが逆に言うと、皆さんです。つまり皆さんのお蔭で、外国人として住み易い所になったと思っております。

## 住民意識——外国人を受け入れているか

ただ、外国人としての住民意識はあるかと思うこともすごく大事ですけれども、逆に外国人住民を1人の住民として受け入れることが出来ているのかどうか。そういうことも一つ私として、逆に伺いたいと思います。すでにこの時代そのものがすごく変化していて、グローバルゼーションとか世界が変化している。EUも統合しているし、いずれか東アジアの韓国、日本、中国始めとして、そういう地域も経済的に統合するだろうと思っております。

昨年は特に「韓流ブーム」によって日本人の多くの若者も韓国に行って留学したり、就職したり、すでに定着している方も大勢いらっしゃいます。皆さんが友達やお子さんが韓国にいて、私のように事業をすれば立場は同じだと思います。向こうでの外国人住民としての生活はしていると思います。

つまりいまの時代は、生まれた所に必ず住む、日本人だから日本に住むとか韓国だから韓国に住む、そういう国籍にこだわるような時期ではないと思うのです。そういう意味では皆さんも、外国人住民として外国人を



ポイ捨ての方がいらっしゃれば、住民として注意をしたり、無視するとか違和感を感じるよりも、より積極的に接近する。そういうことも必要ではないかと思っております。

逆にこういうことも考えられるのです。もし大久保という街に外国人がいなかったとすれば。私が最近びっくりしたのは、この大久保というイメージはすごく暗いと外からの皆さんは知っている。歌舞伎町の後ろにあって、繁華街の悪い面もすごく抱えている。すごく危ない所だと思っていたことを知りました。

しかし、韓国人に加えて大勢の外国人がこの街を活気付けています。金さんがおっしゃったように、昨年だけで300万人の外国からの観光客が来ている。それで、韓国人の店も、韓国人の事業も上手になるように、日本の店も日本人の皆さんの商売も上がっている。そう思うと、必ずしも外国人が住んでいて、問題ばかりではない。むしろこういう現実を真剣に受け止めて、どうやっていっしょに住むのか。未来志向にどうやって本当に住み易い街にして、日本もどんどん外国人を受け入れて国際的な国になると思うのです。そういうモデルの一つとして全国に発信して行く。そういう所になれば良いかなと思います。

柳田——いま李スンミンさんのほうから、問題ばかりでないという一言が入っていたのですけれども、外国人が次第に多くなって来た街という意味でなにか良いこともありますでしょうか。植木さんいかがでしょうか。

植木——そうですね。ここ約7、8年ですかね。大久保通り、それから職安通りに、いわゆる外国の看板が出て来て、それなりに活気が出て来た。というのはなぜかと言いますと、バブルがはじけた時に、この街は死んだようになったのです。その時に歌舞伎町で働くいわゆる三次産業の中のサービス業の人たちが歩いて通える場所、それから悪い意味の怖い人たちも歩いて通える場所だったのです。前は怖い人たちは歌舞伎町1丁目にいたのです。それが職安通りを越えて、我々のほうに来るようになってしまった。

実は私の兄も職安通りの歌舞伎町に住んでいるのです。兄によく言うのです。「お前、こっちに持って来るなよ。もっと遠くに行くように言ってくれよ」というような話も兄弟の中ではしたことがあるのです。だけれども外国の方が来て、私が感じているのは、新大久保から明治通りまで、職安

通りも同じですが、おおむね韓国系の方です。新大久保から大久保駅、あちら側がアジア系の方が多くなっています。中を歩かれると、看板もそんなふうに見えます。活気が確かにそれなりに付いて来ています。

柳田——良いのか悪いのか、ちょっと良く分からない話ですね。(笑)  
皆さんのご判断に任せますということでございます。

今日は「韓人会」ということで金世煥が参加して下さっているのですが、会場には「韓人会」という組織についてご存知ない方がいらっしゃると思いますので、「韓人会」のちょっとした説明とそれから「韓人会」としてはどう考えているのか。それからもう一つ、金世煥さんとしては、新宿の街、大久保の街をどういうふうに見ていますかということを書いていただけますか。

## ニューカマーは現実的に考える

金世煥——一言で言えば、そんなに難しくは考えていないのです。なぜかと言うと、うちの在日本韓国人連合会というのは、韓国人が集まっている組織ですが、違うことがあるのです。なにかと言うと、オールドカマーとニューカマーという二つの区分があるのです。オールドカマーというのは1965年以前に来た人で在日韓国人です。皆さんが言うように民団です。

うちのほうはニューカマーです。1965年以降に来た人です。でもほとんどが65年1月から来た人ではなくて、1980年代以降に来た人です。その特徴と言えれば現実的な思考方式です。考え方が現実的です。ほとんどがここに来て、事業を起しているのです。ここを「コリアンタウン」と呼ばれるのは我々も好きではないのです。なぜかと言うと、逆に言えばここしか踏襲出来ないということです。当時を知っている、ほとんど事業をやっている人は、オールドカマーでなくてニューカマーです。「コリアンタウン」というのは、母国に帰りたくても帰れない人が自分の国に対するノスタルジアを感じたいから作る街です。

でもニューカマーというのは、韓国に2時間で行けます。だからアメリカにある「コリアンタウン」からフランスにある「コリアンタウン」は違うのです。こっちのほうは「コリアンタウン」ではないのです。ただ食堂がいくつあることで「コリアンタウン」と言われたくないのです。なぜ在日韓国人連合会が新宿にあるかということ、結構大勢来るからです。

私はいま西川口に住んでいます。日本に来て西川口に住んでいて、ただボランティア組織の件でこっちに通っているのですが、西川口のほうも結構韓国人は多いです。でも向こうは「コリアタウン」とは呼ばれないのです。うちのほうは組織の立場で言うと、「コリアタウン」と言う言葉は避けてほしいです。

次に皆さんがいまシロコバ辺りを訪ねる時、ふつう見るのは食堂と物販会社です。でも、大久保以外に他の見えない所には、韓国の貿易会社が結構あるのです。いま結構いろいろな問題が出ているのです。例えばゴミの問題とか、地域住民の社会との衝突です。それもあると思うのですが、結構解決出来ない問題ではないと個人的には思います。

うちの韓人会では、その後ろの紙にも書いてございますが、ほとんどが地域社会での共生です。でも「共生」という言葉は我々が使う言葉ではなくて、日本の皆さまから教えてもらった言葉です。うちのほうで「共生します」ということではないのです。ある意味ではうちのほうで飛び込んだ人だからです。

いろいろな活動をしています。例えば地域商店街のいっしょにボランティア祭りをやったり、ホームレスにお弁当を提供したり、毎年1回、日本の大学生20名を韓国のほうに一応各文化探訪というプログラムで参加させていただくのです。もちろん韓国政府が金を出します。そういうこととかゴミの掃除活動とかです。

うちには「とうみ」というボランティア組織があります。「とうみ」というのは、韓国語をご存知の方はこの言葉をご存知だと思うのですが、「助ける人」です。ボランティアという英語を韓国語に直したものが「とうみ」です。その「とうみ」の4割以上は日本の方です。在日本韓国人連合会だからこそ、韓国人だけが集まる場所ではなくて、日本の方も積極的に参加してくれる団体でございます。

柳田——金世煥さん、ご自身の大久保とか新宿の街への思いはいかがですか。

金世煥——個人的に怖い怖いと思いました。うちの先生とたまたまこっちに食事に来るのです。先生が職安通りといっしょに新大久保辺りを考えて「怖い」とおっしゃるのです。でも、実際こっちに来てみればそんなことはないのです。逆に楽しいですよ。楽しくて、韓国語でなくても中国語、

英語、全部放送局で流れるのです。この街って不思議ですね。韓国人の私でも、韓国語が聞けるということで、嬉しい半分心配も半分です。こっちはあくまでも日本だと思うのです。

先ほど李さんがおっしゃったように、時代の変化に応じないと、時代遅れになると思います。ある意味では住んでいる地域住民の立場も非常に自由です。こっちで事業をなさっている人も自由です。この街は誰のものでもございません。ここに4割以上住んでいる韓国人のものでもございませんし、ここに住んでいる住民のものでもないと思います。

なぜかと言うと、ここを訪ねて来る皆さまのものでもあります。だから誰のものだという発想自体が、個人的にはちょっと不思議に感じるのです。私も市のほうには住んでいないのです。でも私のものにも出来るのです。そういうふうに見れば皆さまの温かい愛情で見守って行けば、ただここに住んでいる人と商店街の人だけが努力するものではなくて、訪ねていらっしゃる皆さまが温かい愛情を持っていっしょに作って行けば、良い街になるのではないかなと個人的に思っております。

柳田——森田さんはいかがでしょう。

## いろいろなキムチが食べられる大久保

森田——良くなったこと…。これは金社長に言いたくないのですけれども、僕はキムチが大嫌いだったのです。でも最近、大好きになっちゃったんです。(笑)キムチ自体昔は食べる所という、焼肉屋さんですか。いまは大久保には韓国料理屋さんがいっぱいありますから、いろいろな味のキムチが食べられるのです。ある日食べたら、おいしかったのです。「あ、キムチっておいしいじゃん」と思った自分を発見した時、嬉しかったです。(笑)

後は、この街にいることによっていろいろなことに気が付くことがたくさんあります。先ほど区長さんが「21世紀のキーワードは多様性だ」というお話がありました。そういう、違って良い。同じであることが正しいのではなくて、いろいろなものがあって良い。いろいろなものを考える人がいて良い。考えてみると当たり前ですけど、大久保の街というのは、いろいろな価値観を持った人がいて良いのです。先ほど金さんが言っていたように「誰の街だ」と言ったことにも関連すると思うのです。僕たちみたいにずっとここに、植木さんが言うように「ネイティブジャパン」

として暮らしている私たちにとっての街でもあるけれども、いまここで定住している外国籍の方々にとっても、この街はたぶん自分たちの街だという意識が強いと思います。

それからこの街で働いている人にとってもそうだと思うし、そういう街が大久保なのだということがいまは現実としてあるわけですから、そのこと自体僕は大変素晴らしいことだ。いろいろな価値観があって良い。いろいろなことを考える人があって良い。いろいろなことを言う人があって、いろいろな仕事をする人があって良い。悪いことはだめですよ。ごみを捨てたりとか、そういう悪いことをする人はだめですけど、いろいろなものがあってこの街が出来上がっているということは、この街で暮らしている人たちにとってみれば、実はストレスばかりではなくて、その裏返しもあるのだということです。そういうことに、この街に住んでいると気づかされる。それが大変私にとっては良くなったことだなと思います。

柳田——先ほどまで街は誰のものでもないというお話も出たのですが、逆の発想から皆のものだという流れでよろしいのではないかと思います。ここで街の一部になっている子どもたち。地域と子どもと学校ということで、生活の一部の子どもたちのことについてもお尋ねしたいと思います。会場に大久保小学校の長岡先生がいらっしゃると思うのですが、ちょっと学校の状況についても簡単にお話しいただけますでしょうか。

長岡——はい、振られてしまいました。大久保小学校長の長岡富美子と申します。よろしく願いいたします。前面にいらっしゃる方々は、本当に大久保小学校を愛していただいています。植木さんも三澤さんも森田さんも全部大久保小学校出身ということで、本当に大久保小学校は心強く思っているところです。

## 大久保小学校、64%が外国籍のこどもたち

本校の現状をちょっと話させていただければと思います。本校は、いま64%ぐらいが外国と関わりのある子どもたちです。ですから38%ぐらいが純粋な日本の子ども。純粋というのでしょうかね。というような日本の国籍の子どもたち。でもその62%の中には、日本籍の子どももたくさんいるわけです。しかし、父親とか母親が外国のお父さん、お母さんであるというようなことも含めての数値でございます。

いまここでは日韓ということが言われておりますけれども、本校は先ほど植木さんが言ったように、10カ国以上もう12カ国ほどの国々の子どもが入って来ております。そんな中で皆さんの趣旨と反するかどうか分からないのですが、こんなふうに思いました。学校というのは、本当に私はこんな役割を担わなきゃいけないのかなということを、この大久保小学校に来て、強く感じています。

先日、大久保通りにある日本語学校に通っている留学生たちのスピーチコンテストがありました。そこで私、審査員として行かせていただきました。世界の17カ国ぐらいの留学生の皆さんが「世界と私のつながり」というテーマでスピーチをしておりました。その中で印象的な言葉がありました。「僕たちはアダムとイヴの仲です。私たち人間が出来たのではないのか。それなのになぜ韓国人、日本人、アメリカ人、なに人と言って差を付けるのですか。私たち皆はアダムとイヴから出来た人間ではないですか」というような話がありました。これこそ私は教育の原点かなと思っているのです。

人間として子どもたちを地球人として育てて行くという学校の役割。これは大きな役割です。その中でもいま言ったように、街は誰のものか。本当に地球は誰のものでもない。人間のものということを考えますと、どうあるべきかというのが、ひとりでに人間教育としての学校の役割があるだろうと思っています。

## 触れ合い、目を向ける関係

それからもう一つは本日本校で「日本親子教室」というのがありました。今日最終日を迎えて、いろいろな国々の親子が日本語を学ぼうと本校を使ってやって参りました。その時に、私が玄関でさよならとあいさつをした時、何人ものお母さんに涙目で「先生ありがとうございます」と言っていました。この「ありがとうございます」の意味は何でしょうか。タイ人であったり、フィリピン人であったり、韓国人であったり、いろいろな国々のお母さんたちです。本当に日本に触れあい、日本語を教えてもらってコミュニケーションが少し出来て、その喜びと、そしてそういうふうを考えてくれている人が身近な地域にいるということへの愛情の表れだと私は受け止めました。

そんな中であって、学校はやはり地域の架け橋にならなければいけない。学校という一つの機関を通して、地域のいろいろな思いを持っている人たちのつながりが見えて来るのではないかな。ですから地域の元からいる日本の方々、そして韓国の方々、いろいろな国々の方々と結び付ける役目も学校は持っているのではないかな。そんな思いで、私はこれからもっと地域の中の架け橋となって行けるような学校づくりをしたいと思っております。皆さんの応援を私もぜひいただきたいと思っていますので、よろしくお願ひします。

柳田——ありがとうございます。非常に大きな教育のビジョンを持って教育に当たっている大久保小学校は素晴らしいと思います。それも多様な子どもたちがいてこそ、初めて生まれてきた考え方なのかもしれませんですね。そういう意味では、素晴らしい地域になって行く可能性が、いまでも素晴らしいのですが、さらに飛躍して行けるのではないかと思います。

他にまだ住民としての思い、あるいはこの街に来て仕事をしている身としての思いとして、言い足りない方はいらっしゃるでしょうか。よろしいですか。会場のほうから質問が来ている分を少し挙げてみたいと思います。住民としての思いとはちょっと違うかもしれないのですがけれども西村さんが「日本の側からは韓国から学ぶことがたくさんあると思います。韓国の方が日本から学びたいと思っていられることがあるかどうか教えてください」ということです。もう少し詳しいお話をお聞きできますでしょうか。西村さんどちらでしょうか。

西村——四谷日本語サークルで日本語のボランティアをさせていただいております西村と申します。ここ10年間ぐらい日本語を通して韓国の方たちとたくさんお話をさせていただいて、その中から本当に一生懸命さとか、韓国の食べ物からなにかいろいろ教えていただくことが多くて、とても勉強にもなりました。

私の娘が10年ほど前「日韓学生フォーラム」に参加いたしまして、韓国の学生の皆さんと歴史的なこととかいろいろお話しするチャンスがあって、かなり考えさせられることも多々あったのです。それで日本としてはどういうふうにして行かなくちゃいけないかなということを、私なりにいろいろ考えはしたのです。これから共存・共栄・共生して行くためには、やはりお互いの良い所を認め合って、そこからスタートするものかなと思

うのです。

先ほど「ルックジャパン」とか「ルックコリア」とかということで、韓国から日本に住まわれて、例えば植木さんや三澤さんや森田さんが、大久保は古い街で文化もある。その文化を大事にしていたことがあると思うのですが、そういう中から何か金さんが感じられたこととか「ここは認められるなとか学べるな」とかそんなふうに思われたことがあるのかなと思って質問させていただきたいと思いました。

柳田——これは金根熙さんにご質問ですか。金世煥さんにご質問ですか。

西村——「韓国広場」の社長さん。

柳田——いろいろご意見があるかと思いますが、全員にお聞きしたいと思います。

西村——はい、よろしくお願いします。

柳田——では、李スンミンさんからにしましょうか。

## ストレス、日本は韓国の10分の1

李——この街…具体的にはこの街よりも、私の場合は日本に来て9年間住んでいて、単純に比較するとあれなんですけれども、韓国人が日本人から学ぶことはもう山ほどあると思っております。幾つかの例を挙げると、他人に迷惑をかけない。そういう精神は、私は韓国人にない素晴らしいことだと思うのです。私は9年間住みながら、ストレスを韓国よりはたぶん10分の1ぐらいしか感じないようになりました。つまり人からのストレスがすごく少ない。そういうことはたぶん他人に迷惑をかけない。そういう精神から来ると思います。

もう一つは、すべての方はそうではないのですが、ほとんどの日本人の方はすごく正直ですね。日本に来て1年目にあったことなのですが、ビッグサイトを見学した時に財布を忘れたのですが、これが学校に連絡して戻ったのです。その時は本当にびっくりしました。韓国人ではあり得ない。私としてはそういう経験でした。たぶん拾ったものを返すそういう精神が、いまは分からないのですが、少なくとも9年前の私の経験にはなかったと思います。

もう一つはすごく真面目ですよね。例えば韓国語をうちの学校で教えながら、日本語もちょっと昼間にやっているのですが、日本語を勉強



なさる韓国人の人々は勉強が続くのが多くても3カ月。ほぼ1カ月か1カ月半。まあ3カ月というのはすごく長いほうで、6カ月、1年やる人は珍しいですね。

それなのに、日本人の方は1年間続くのが普通です。2年間続く方もいらっしゃると思いますし、すごく真面目で勉強熱心です。そういう人の質という面では素晴らしいと思います。韓国人が必ず日本人から習ってほしいところでございます。

柳田——金根熙さんお願いします。

金根熙——どうも。感激ですね。これが質問になるぐらいだから。なぜかと言うと、私たちはずっと子どもの時からテレビでもラジオでも新聞でもなにになに事件があった時、まずアメリカはどうだ。先進国はどうするのだという時、一番目はアメリカ、その次は日本です。

基本的に私たちが学びたい人として真似する対象かもしれませんが、学びの対象が日本だったのです。一回も私たちがなにかを日本に対して教えられるとか、見せてあげるといふことはなかったと思います。でも、そのマスコミの報道の姿勢はいまもいっしょです。どの新聞でもどのテレビでも、なにか新しい事件があった時、アメリカの例はこうで、日本の例はこうで、ヨーロッパの例はどうだということで、知識なのです。

だから自ら先進と後進と遅れていることと、先進という知識を韓国人の中では持っています。私がこの地域に来て学びたいこと。ぜひ学びたいものは何か言うことです。皆さんはこの地域は誰の地域でもないのだとおっしゃっているけれど、私は間違っているかな。私の地域だと思っています。私の所です、ここは。私、金根熙の地域であって、私の所だと思っているのです。

## 地元を、仲間を愛する意識学んだ

これはどこから習ったかとすれば、日本人から習いました。地元の方たちから習いました。この地元を愛する意識、仲間を愛する意識、これは素晴らしいです。その代わり、よそ者に関してはちょっと厳しいけれどね。それだけは学びたくないです。でも、これはムラ社会の伝統だと思っています。とにかく自分の地域を愛して、自分の街を良くしようとする努力は非常に素晴らしいと思っています。これを私はぜひ学びたい。

ついでにもう一言言って良いですか。なぜ話すかと言うと、地元の日本人の皆様方が非常にとまどいを感じているようで、少し謝らないとならないと思って。すみませんでした。なぜかと言うと、たぶん三澤さんはある程度知っていると思います。いま韓国人の街になったとか「コリアタウン」とか呼ばれている。その形を作った張本人の中の1人が率直に言って私なのです。

でも私がもうちょっと話したいのは、ここが「コリアタウン」として呼ばれる前にどんな所だったかと言われれば、たぶん記憶はあると思います。その直前がどんな状況かと言うと、日本のすべての週刊誌とかに「ここには南米の人とか、東アジアの人とか東南アジアの人たちがたくさん集まって、男たちが自分の欲望を満たせる所だよ」ということがすべての雑誌、新聞に出ていた。もうそれが、腹が立って腹が立ってしょうがなかったです。びっくりしたのは、鹿児島に行った時、鹿児島の友達が私にそう言うのですよ。「すごい所に住んでいるんですね。行ってみたいのだけど」と言った時、もう腹が立って。思わず「馬鹿野郎」という言葉が出てしまったのだけどもね。これは日本人の友達なのです。

だから一橋大学を出て、日商岩井に勤めて跡継ぎで鹿児島に戻った人が「じゃあ一回遊びに来て」と言ったから「そんな馬鹿なことを言わないでくれよ。私が住んでいる所だよ。そんなことはマスコミとヤクザの仕業だよ」。ヤクザが1円も広告費をかけないで、やろうとしてそこまで街を悪くしたので、すごく怒ったことがあります。これを、地域住民が本当に涙ぐむほど大変な努力をしてなくしたのですよ。

そのようなことがあったり、都市というものは避けられないです。歌舞伎町がここにある以上、人間が住む以上。人間には欲望があるから、とにかく繁華街に回りますし、繁華街にはそんなことは避けられないと思います。いまの大久保とかの街は、自分の魅力を日本全体に発信しようとするのには、力が足りないのではなくて、そうするためには歌舞伎町の力があんまり大き過ぎます。大きな社会的な力を持っている歌舞伎町の隣ですから、影響されがちなのです。

その前はどうかとすれば、最初は台湾から、タイ、それに南米、韓国、このような形で順にずっと代わり番このような形でいろいろ回っているのです。全体とは言えないのですけれど。なにしろ私は社会学をやっ

ているから、ずっとそれは自分なりに見ているのです。

そういう所がいまは「文化」というもう一つのキーワードが付いた。申し訳ないけど、初めて「文化」というキーワードが付いた。韓国文化、韓国生活文化というキーワードが付いた形の街づくりに少しは役に立つことになってのではないかな。良い意味では。

もう一つ申し訳ないけれど、ちょっと我慢して。これは避けられないから。これも一つの要因だからこの良いチャンスを活かして、情報発信をしてみませんか。去年300万人来たけど、偏っていますからもうちょっとバランスを良くして、いろいろなチャンスを持ってやれば、これは本当に多様化を味わえる日本で唯一の「実験台」と、先生はおっしゃいました。ここで成功すれば日本は成功します。これは本当ですよ。大変なことです。ここで成功すれば成功出来ます。

7、8年前にアメリカが日本との貿易摩擦で、すごくうるさく言っていた時に、構造改革とか構造なんとか協議とか言っていた時に、日本のNHKが主にアメリカですが、アメリカに対して、一つの番組を作りました。日本に来て成功している人の典型と、日本に外国人が住む街として「良い街がこんなにあるよ」ということで、この街を紹介されて、私が紹介されたのですよ。

## ハーモニーの街、発信を

というのは、ある意味で良い材料なのです。日本が「そんなに閉鎖的ではないよ。排他的ではないよ。ちゃんと共に生きて、共に栄える国だよ。あなただけ、自分のものだけがグローバルスタンダードだから、このようにしなさいということに関してはちゃんとそのように出来ないかもしれませんが。いっしょに互いに自分の文化、自分の生き方を認めながら生きていく街があるよ」というようなことが主張出来る、いまの所はただ一つの街です。日本の何百人の研究者が見ているし、外国のマスコミもずっとここに注目しています。

だから私たちの力で地元住民、地元の皆様、力を合わせましょう。そして、この街を本当に魅力ある街にしましょう。多様な違うものを合わせる。それがハーモニーであって、美しいものなのです。同じ色でペーっと塗られている絵であっても、誰も美しいと思わない。違う色が混じり

合って良い絵、良い形、美しいものが作れます。音楽だってそうです。ドミソは全部違います。でも違う音を合わせて一つの美しい音が私は出来ると思います。すみませんでした。あんまり熱かったです。よろしく願います。

柳田 はい、熱い言葉をいただきました。金世煥さん、さっきの質問に戻りますけれどいかがでしょう。

## 好きな言葉は「きずな、のれん、魂」

金世煥——日本の方に学びたいことは先ほどと同じです。たくさんあります。特にこういう言葉を引用させていただきたいと思います。一つは「絆」という言葉です。韓国では「連帯感」という言葉で訳されるのですが、本当は「連帯感」だけでは足りないのです。「絆」というのは、本当は結構難しいですよ。

韓国では、「絆」とまったく同じ言葉はないのです。言葉がないということは意識がないということでもあります。でも「連帯感」という言葉は、「絆」に近いですよ。でも「絆」のほうがもう少し上かなと思います。ただ「絆」を大切に作る社会ということで、「絆」をこっちに来て大事にしたいということを知りました。

二番目が私の場合は、専攻がレストラン経営に関連するマーケティングです。「のれん」と「老舗」という言葉が好きです。特に「のれん」という言葉が好きです。「のれん」というのは、伝統を守るということです。先ほど二代目とおっしゃったのですが、韓国では200年、300年という「のれん」の老舗はないのです。でも皆さんが韓国の飲食が好きだということは、歴史は結構浅いですよね。20年、30年しか経っていないのです。例えば列車食堂で「日本食堂」という有名な所があります。それが1950年代から始まったわけですが、でも、それ以前には韓国では食文化というのはほとんどなかったのです。戦争が起きて食べるものがなかったのです。

最近やっとこっちの食堂が繁盛していますが、ある国の文化をPRしたり、知らせるためには食文化が一番良い媒体になるわけです。それを通じて発信したいということであるのですが、もう一つ、少ない資金で誰でも出来るわけです。韓国のことわざで「お母さんは誰でも料理師」です。韓国の料理というのは、専門家が作る料理もあるのですが、普通のお母さん

がある程度は出来るのです。だからやっぱり食堂のほうが多いわけです。

20年、30年後にはただ食堂とか貿易会社以外には、アメリカみたいに政治家として、韓国人が活躍したり、弁護士も出てほしい。ある特定な業種だけに、韓国人とか外国人が働く場所ではなくて、もう少し幅広く活躍できるような日本の社会の仕組みが欲しい。ということが本音です。

次に、「魂」という言葉があります。私はいつもその言葉をかぶせると結構涙が出るのです。「魂」という言葉は「侍」ということで、よく引用されるのですが、韓国では「恨」です。でも訳すれば「恨」でもないのです。普通日本人によく言われるのが「頑張れば」ということです。テレビCMにも出ているのですが、どうやって頑張れば良いですかね。でもどうやって頑張るかという解答が、「魂」だと思えますよ。「魂」を持ってやれば、ということだと思えます。われわれ外国人、特に私は個人的には「魂」と「のれん」、それに「絆」。その三つの言葉を体に心からしみじみ感じて勉強させていただきました。

柳田——ありがとうございます。いろいろな切り口からと言いますか、いろいろな角度から、日本人の住民の皆さんそして韓国の事業者の皆様からの本当に温かい熱い思いが皆さんに届いたのではないかと思います。

この新宿、大久保の街づくりのために、具体的にその熱い思いをどんな課題に向けて行ったらよろしいのでしょうか。具体的にどんな課題がありますか。三澤さん、いかがですか。

三澤——課題、具体的—これは私どもといたしましては、実際にこの街の中で暮らしてみても、いま外国人いわゆる韓国の方でも住民意識を我々と共存する、そういった意識改革が必要ではないかと思っています。商売をしていらっしゃる方は「商売が良ければ良いのだ」と。私からはそういうような感じを受けるのです。もはやこの住民の中に共生して行く、その一つのエネルギーをこの街に、我々にも貸していただきたいのです。そして共にこの街を良くし、明るい、そして国際化の都市として発信が出来る。そのような形が、皆様方外国人の力が必要な時代になって来たとは実感している次第でございます。

柳田——植木さんいかがでしょう。

植木——今後どうして行ったらよいのだろうか、ということですけども。私は個人的に、外国人の方が過去は出稼ぎに来て、ビジネスのために

稼いだら国に帰ってしまう。そういうふうには思っておりました。いま、ここで外国人の割合が40数%を超えた。実感的には60%を超えている。この方たちと共生して行くためには、出稼ぎの人たちは、相手にしません。ここにいっしょに住んで、生活をして行く。実際に住んで行く人たちと共生して行きたい。このように感じています。

柳田——はい、森田さん。どうぞ。

## 日本人とのコミュニケーション

森田——いま大久保地区にたくさんの韓国の方々が住んでいらっしゃって、日本語を話さなくても生活出来る状況になっていますよね。だから韓国の方々だけのコミュニティの中で、ものも食べられるし、洋服も買えるし、十分それで生活出来ちゃう状況に、この小さな大久保の街の中の韓国の人たちになっている。それで良いのかな。

三澤さんが住民意識とおっしゃいましたが、これも関連すると思います。せっかく韓国の国から日本という国に来て生活をしているのに、日本に来ていたという意識を持たずに、自国の考え方のみが通用する範囲内で生活をしている方々が今後も増えて行くということは、非常にもったいないことだと思う。せっかく日本に来ていたのだから、僕らとしても日本のことをもっと知ってほしいと思います。こちらの受け入れ側もそれなりの対応がもちろん必要ですけども、ここまで韓国の方々が増えていらっしゃると、この小さな大久保百人町という町の中にも韓国人だけのコミュニティが出来つつある。それはちょっとそれで良いのかなということを感じます。それがやっぱりいま大久保の街に住んでいらっしゃる韓国の方と地域に住んでいる私たちの間の、これをどうするかということが大きな課題だと思います。

柳田——はい。李さん、韓国の方として仕事をここでやっている立場としての課題を、なにかお感じになりますか。

李——三澤さんと森田さんがおっしゃった通り私も同じように、外国人としての外国人住民意識というものがすごく大事だと思うのです。ただ植木さんがおっしゃったような、ここで住民意識を持つ方だけを住民として受け入れていっしょに協同して行くことももちろん大事だと思うのです。

もう一つ大事にしなければならないのは、事業を持っていたり、こっち

に定着して、住民としての意識を持たなくても、すでに住民として、留学生の方とか予備軍と呼ばれる方々がいらっしゃる。最近「韓国から日本に直接投資して日本に住みたい」。そういう方々も増えています。そういう場合「日本についてよく分からない。日本語も分からない」。そういう方が多いのです。

こちらにいらっしゃる韓国人の3人の方はおそらく日本で一番初めに日本語学校とか、大学とかで日本の教育に関して、ちゃんと教育された方だと思ふのです。

そういう意味では、日本のルールとか、日本人といっしょに住むための基本的な姿勢とか、そういうことが出来ていると思ふのです。

先ほど申し上げたような方々、あるいは観光とかで短期滞在で日本に来て、この街に来る。そういう方々の場合は、予備軍で日本に住む可能性はあるのですけれども、日本のルールとか日本人の生活習慣とかは分からない。それで自分たち母国のルールだけしか分からない。それで母国でやるようなことを同じようにここでもやる。そういうことが、ここにすでに住んでいる日本人住民から見ると、すごく抵抗感を感じる。そういうことだと思ふのです。そういう方々を排除すれば良いのかということではないと思ふのです。この地域を、良い印象付けるように皆さんと我々が頑張らなければならないと思っております。

いろいろ方法があると思ふのです。金根熙さんのレジュメの中にもありますけれども、韓国人のネットワークを活用して、定着プログラムのようなことをやって、日本のルールは韓国のルールとは違うのだということを皆さんに指示して行く。日本に住むためには、こういうもので協力しなければならないとかそういう何らかの形のプログラムが必要であると思っております。

彼らは日本に来て、そういうことをわざとやるよりも、分からなくてやる人が多いと思います。そういうことに皆が取り組んで行けば少しずつ解決して行くことではないかと思っております。以上です。

柳田——ありがとうございます。地域住民としての意識を持ってもらうということが日韓両方のメンバーの意見だと思ふのですけれども、補足される方はいらっしゃいますか。はい、小倉さん。

小倉——先ほどから、日本人つまりここの住民の方のお話と韓国人の側

のお話をずっと伺っていて、私はやっぱりいまが重要ではないかなと思っています。いまの段階で、ある程度道筋というものを決めておかないと、あとで非常に困ってしまうようなことがあると思いますね。

それは先ほどこの事前の昼食会の時に、私が「コリアンタウン」というのがロサンゼルスにありますよね。その話をしたら、韓国人の方は非常になにかいやがっているような、つまり「コリアンタウン」と言われたくないということもあります。日本人の側も、日本の方が昔から住んでいた街ですので「コリアンタウン」ということはもちろん言われたくないわけです。

私の考えでは、ロサンゼルスとここはまったく環境が違うのですよ。まったく環境も制度も違います。違うのですけれども、だんだんそうなっていく可能性もあるのではないかなと思います。

ロサンゼルス「コリアンタウン」を見てみると、急速に大きくなりました。行かれた方は分かると思いますけれども。最初は小さかった「コリアンタウン」が、西はもうハリウッドの近くまで来ています。東はもうダウンタウンまで来ていまして、急速な成長と言いますか、誰も止められない。そういうことになっています。

そして、この中が非常に閉鎖的なのです。例えばアメリカ当局は「看板にハングルの看板は掛けても良いけれども、必ず英語を併記してください」と言っているけれども、韓国人側はそんなことも取っ払っちゃって、英語の表記もしないでハングルだけで表記する。要するにあそこにパーッと飛行機で行けば、完全に、韓国での生活と同じような生活が出来るということがあります。

## 韓国にチャイナタウンがないのは

なぜこういうふうになくなったかと言うと、いろいろな要因があると思います。一つは韓国人の食生活が非常に保守的で、現地の食生活に徹底的に馴染まないということがあります。そういうことがあって、食べ物というものをどうやって解決するかということで、だんだんその街が形成されて行くわけですよね。もちろんそれだけではないのですけれども、それが非常に大きな要因なのです。

そしてその中で韓国人の人たちは、かなり閉鎖的な心を持っていて、そ



の中に入ってしまうと「もう外側のことは知らないよ」とそんな感じになってしまうということがあります。何で韓国の人が閉鎖的かということですがよく引き合いに出されるのは、韓国は世界でほとんど唯一と言われているぐらいチャイナタウンがない。あれほどの華僑の力を持ってしても、中国人がある程度まとまった土地を占めて、その中で暮らして行くということが出来ない。

(ソウルに) ロッテホテルってありますよね。かつてはロッテホテルの裏側にソゴンドン(小公洞)という中国人街があったのですが、それも撤去されちゃいましてどこかに行っちゃいました。そういうような感じですので、外国人が入って行って、集住が非常にしにくい社会なのです。

集住が出来たのは、植民地の時です。植民地の時に日本人が入って行って、中国の秦も入って行って、ソウルのだ真ん中で「中国か、日本か」という勢力争いをしました。そして日本が明治町といういまのミョンドン、あそこは泥だらけの所でチンコゲと言って泥ばかりで韓国人があまり住みたくない所だったので、そこに日本人が入って行って日本人町にして、明治町という所に三越ですとか、朝鮮銀行とか映画館も作って、そしてコロニアルモダンのそういう都市にしたわけです。そこに集住したという歴史がございます。

その時韓国の人たちが一番いやだったのは、日本人の下駄の音だったというわけです。下駄の音をカラコロンさせながら我が者のように自分たちの土地を歩いているその日本人が非常にいやだったわけです。でもそれは不法に入って来たわけではなくて、合法的に入って来たわけですからどうしようもないということです。ちょっとそういうようなことが、いまこの場所で起きているのではないかなという気がいたします。

韓国では日本人が集住しましたし、それから清の人たち、中国の人たちも集住をしました。そして日本人は、チョンノリといういまもありますけれども、あそこの商権を取ろうと思ったのだけれども、結局あそこには入り込めなくて、韓国人から排除されました。そして明治町に日本人の街を作ったわけです。それが解放後もそのままミョンドンと言う形で繁華街になっております。ですからあそこは、もともとは日本人街なのです。

そういうように、植民地時代には外国人が来て集住した所があるのですが、開放後はそういうことはございません。ですから韓国の人たち

が「日本人は排他的だ」とかおっしゃるのですけれども、韓国の方もそうです。そして外国に行って一つ「コリアンタウン」というものを作ってしまうと、そこが非常に閉鎖的になってしまう。いまロサンゼルス「コリアンタウン」は、アメリカ人が焼肉を食べたりしに来ることは来ますけれども、それ以外にはあまり外部との交渉がないということです。

そうならないためには、ここに住んでいらっしゃる方が排他的になっては困る。受け入れる側は排他的ではないと思います。受け入れているわけですからね。実際に外国の方を40%も受け入れているということは、ここに住まわれている方は排他的ではないわけですよ。ここに住まわれている方を「排他的だ」と非難したり、批判するのは、間違いだと思います。ここに住まわれている方は受け入れているわけです。ですけれどもここに住んでいらっしゃる方が、今度日本社会に対して排他的になっては非常に困るわけです。

そしてそれからルールを守っていただかないと、困るということです。このルールを守るという点も、おそらく先ほど韓国の方もおっしゃったのですけれども、韓国の方々が、日本だから特別にルールを守らないでポイ捨てをしたり、そういうことではないと思うのです。韓国にいらっしゃると分かりますけれども、韓国の道端にはいろいろごみが落ちてますよね。ですからおそらく公衆道徳という意味での社会的な国民国家の統合というのがもうちょっと必要なのだと思います。

ですからその所は韓国社会でも非常に強力なキャンペーンをしています。「道端にごみを捨てるのはよしましょう」ですとか。韓国の個人の家にいきますと、家の中は非常にきれいです。ちり一つ落ちておりません。そういうような家が多いのですけれども、ちょっと外に出るとごみがいっぱい落ちている、それは韓国人が、汚いのが好きだとかそういうことでは全然ございません。ただ単に公衆道徳という概念をまだ持っていない方がたくさんいる。そういうことだと思うのです。

ですから外国に行っても、そういう態度で振る舞うから、たばこを捨てたりするということがあると思うのです。ですからそれは、徹底的にキャンペーンをやるなり何なりして、最初にはまずルールを守っていただかないと共生は出来ない。その所はきちんとやって行くということが必要だと私は思います。

柳田——どうもありがとうございます。会場の皆様のほうからも、課題に関してご質問ですとか、意見がいくつか来ております。行政に対するものが多いので、小柳さんのほうから、読み上げ等お答えをいただきたいと思います。

小柳——いくつかいただいています。その前にちょっとお話ししたいのは、平成元年89年の頃に広報とかこちらから呼びかけたり意見を聞いたり、またはアンケートとかそういう手法を使って、地域の課題に対してどうしようかということ考えた時期があります。

あの時にちょっと私反省しなきゃいけないことがあった。というのは相手が分からなかったのですね。結局日本人の方については分かるのですが、外国人の方の誰に発信して良いのだろうか、誰から話を聞けば良いのだろうか。その辺が本当に分からなかった所がありました。

あの頃に例えばアンケート等をやりますと、大変失礼な言い方になるかもしれませんが「外国人の方がそこにいること自体が問題だ。地域課題だ」。ごみの出し方が全然分かっていないとか、部屋を貸すと油で汚くしてしまうとか、例えばいまの課題で言えば自転車を適当な所に止めてしまうとか、いろいろな発生源であるというような地域課題だという捉え方をされる日本人側の立場を私どもは聞いていた。

ですから本当の意味の共生、共にここで暮らすというまで、なかなかそこまでその時代においてはレベルが上がっていなかった。ただ、いまここに来て改めて思うのは、韓国の方もそうですし、地域に住まわれる日本の方もそうなのですが、それぞれいま本音で話しをされている。ですからそこでは片側の意見だけを聞くのではなくて、両方の意見を聞きながら、行政としてなにが出来るのか。これから本当に取り組める課題がある程度見えて来る。そういうような時期です。

## 区が「多文化共生のためのセンター」

私どもはよく「協働」と言う言葉を使っておりますが、行政だけがなにかをするのではなくて、地域の方々と地域に暮らす方々と協働して課題解決に向けて取り組んで行きたいと思っております。

今いただいたご質問や意見の中で一番目につくのが「交流」ということです。例えば高木さんからのお話ですが、「ソウルには架け橋という日本語

喫茶店があって、誰でも気軽に日韓交流イベントに参加し、友達を作ります。新宿にはそのような交流の広場がありますか。だれでも気軽に参加出来る交流の場を設ける企画などはありますか。なければぜひ企画してほしいと思います」。それとか「韓国に対するイメージが変化しました。その中で一過性の交流ではなくて、持続的な交流、表面的なものではなくて、そういうものをどのような方向性を示して行くのか。とりわけ行政はどう思っているのか」とか「韓国の方々とおしゃべり出来るなにかグループのような機会があったら良いと思います」というご意見とか、あとは「国際理解教育というのは、幼い頃から環境を整えることがとても有効だ。大久保地区でも子育て支援施設を作り、子ども同士交流出来る場、大人が国籍・文化の壁を超えて触れ合える場が出来れば良い。大久保地区に子育て広場として、場を提供していただけないだろうか」。こういうようなお話がいくつかあります。

私どもが17年度に取り組もうという一つの試みは、交流の場をいかに作るかということです。「多文化共生のためのセンター」というものをこれから立ち上げたいと思っております。ここには外国人の方への情報提供ですとか、グループのネットワーク化とか、人や団体の交流を通じて互いの理解を深めることが出来る。そういう場を作りたいとそういうふうな考え方をしております。

具体的にどんなことを予定しているのかと言いますと外国人相談事業。これはいま区役所の1階にも3カ国語についての外国人相談をやっておりますが、そことも連携しながら、もう一つそういう場を作ろうと。生活情報等の提供。これについては、いま3カ国語と日本語にルビを振って生活情報誌ということで、いろいろ生活するうえでの必要な情報をコンパクトにまとめてなおかつ1冊の本にするのではなく、いろいろな形でコピーを取ったり出来るような形のペーパーを作っています。外国の方が暮らして行くうえで、先ほど言いましたルールを知らないということもありますので、そのルールをきちんとしていただきたい。そういう情報も提供して行きたい。

日本語学習への支援。これについては日本語学習の拠点を「多文化共生のためのセンター」に設けてなおかつ地域の中でも、いま8カ所ぐらい想定しているのですが、日本語学習への機会の場を提供して行きたい。この

ようなことを考えております。

ボランティア、NPO間のネットワーク作り。これも今回立ち上げるにあたっては大きなテーマとして「多文化共生のためのセンター」として考えて参りたいと思っております。

なににしましても、行政が場を提供して、そこで行政がなにかをするのではなくて、その場を大いに活用していただいて、皆さん方で新しくその場を利用した交流、またはそこから発展して行くネットワーク化。そういったものを作れば良いのではないかと私どもは思っております。いま会場からいただいたご意見の中で「交流」という言葉がかなりキーワードで多かったものですから、それに対して新宿としてはこのような考え方をしているということでございます。

柳田——行政が後ろから力強くバックアップしてくれることで、主役である街の方々、事業者、日韓の住民含めて皆で頑張っているのではないかと思います。金さんご意見ですか。

金根熙——いまの「交流」に関して一言。新宿区がやってくださるのは非常に心強いですけれども、私たち民間でも計画があります。民間がやれば、行政より少し楽しいよね。(笑)新宿区も楽しくしてくださいね。

「KOREA PLAZA」。私が地方に行ってあいさつしたら「コリアンプラザですか」と。聖地と言われるのです。「冬ソナ」の聖地と言われるぐらいなのだけど「コリプラ」とも言われる。そこがちょっと狭くて。隣ですけれども、引っ越しします。現在地の反対側のビル3フロアを使って、その地下1階の約50坪ぐらいを交流の場に提供したいと思っています。いろいろ楽しいことを楽しんでください。

## たのしめる民間の「交流の場」

そのの屋号、商号も皆さんから公募したら千何百人ぐらい集まって、その中でKOREA PLAZAの略称の「コリプラカフェ」を作りました。5月頃にオープンすると思います。もう一つの交流の場は、いま若者の交流の場が少ないのではないかなと思って大学生を中心に、歌舞伎町の仁寺洞の真裏ですけれど、建物を建てています。2階に大学生たちがライブを楽しめるような施設を作っています。普段はビールを飲みながら、ビアホールみたいなことをしながら、いつでもライブが出来る。日本の大学の

学生たちも韓国の学生たちも来てライブしてくださいというライブの場所を作ります。

いま私たちがやろうとしている部分がそうで、いまの人は「コリプラ」というKOREA PLAZAの地下では、ゆっくりどんな団体でも話しすれば使えるようにパーティーも出来るし、話し合いも出来るし、映画も見られるし、ビデオも見られるし、音楽、小さな集いも出来るしということで、オープンしたいなと思っています。ぜひ交流の場として使ってください。ここまではコマーシャルでした。(拍手)

柳田——大変楽しい提案が一つ出ました。本日はもう時間もあまりないので、日韓両方の立場の方々、こうして直接かなり本音を出して対話をするという貴重な場となりました。一回きりではなくてこれから対話が続いて行って、ディスカッションだけではなくて行動にアクションにつながって行けば良いのだと思うのです。それ以外の方々からも今後に向けての提案の話、前向きの話をして、今日の結びとしたいと思います。森田さんいかがでしょうか。

森田——そうですね。もっとお互いを知ることが必要だろうと思いますね。それも例えば日本人としてとか、韓国人としてとかという所から出発するのではなくて、僕と金さん、三澤さんと李スンミンさん。そういう個と個の、個人と個人のつながり。そういう関係を広げて行くことがたぶん大事なのだろうと思います。

今日は大久保小学校の校長先生が見えていますけど、子どもたちを見ているとそういうふうなことを感じるのですよね。ふだん遊んでいる時に別になに人という看板を背負っているわけではないですよね。普通に遊んでいるし、普通に勉強しているし。だから大人もまず個人から、個と個のおつきあいから出発しないと、どこかでボタンを掛け違っちゃって、「日本人のこういう所が嫌い」とか、そういう発想につながって行っちゃうのだと思うのです。そうじゃなくて、個人と個人のつながりというのがまず大事だと思います。

それから小倉先生のお話の中でも「価値の共有」というお話が出ていましたけれども、金社長のほうからも似たようなご提言がありました。お互いに共有出来るものを作り上げることがたぶん大事なのだろうと思います。日本人のものとか韓国人のものとかではなくて、皆で共有出来るようなもの

の、要するに皆のものですか。それが街になればたぶん一番良いのだろうと思いますけれども、そこまで行かなくてもそういう共有出来るようなものを作ることが出来ると、大分意識が変わって来るのではないかなと思います。その辺から出発すれば良いのではないかなというふうに感じます。

柳田——ありがとうございます。金世煥さん、ご意見ありますか。

金世煥——先ほどおっしゃったのですが「交流」と言うのは…。いま日本と韓国という言葉を使っているのですが、それはちょっと避けてほしいですね。韓国人だけではないので、それは避けてほしい。

「交流」ということで、だれでもアイデアはいっぱい出るのです。でもそれが実現出来るかどうか。それも定期的に行われるかどうか。参加した人がどういうものを得られるかということです。うちの韓人会でも4年ぐらい活動しているわけです。やっと分かったのは、楽しくなきゃいけないということです。だから仲良くなるうとか、「共生」という言葉は難しい。楽しければそれで良いですね。韓人会という組織では、楽しい企画をして行こうと思っております。ただ、その組織のPRではないのです。うちのほうはあくまでもボランティア組織です。それで、皆「企画がいま欲しいです。どういう企画がありますか。私たちも参加します」ということで、声をかけて来るのです。実際にやってみれば、ほとんどの人が参加してくれません。この場だけの熱い熱で話をしているだけです。本当に参加出来るかどうか。それが出来ない限りどういう良い企画をしても、水の泡になっちゃうんですね。だから本当に皆さんが参加することによって、次の年にまた大きな企画が出来上がるということを理解していただきたいと思っております。

柳田——李スンミンさん、いかがですか。

## 繰り返す対話を

李——本当に今日は日本人住民の考え方も、そして外国人住民の考え方もいろいろ混ざって本当に良い機会だと思うのです。こういう対話の場が一過性で終わらなくて、今後ともいろいろな形で定期的に行う必要があるのだろうと思っております。そのためにはいろいろな枠組みが必要ではないかと思うのです。こういう対話の場を作った方、そしてそれ以降担当する方の定期的な対話の場を作ることも必要です。「共生」にも私は、個人的な

ことかもしれませんけれどもお願いがあるのです。

例えば「外国人住民基本条例」とかそういう、新宿の街は外国人も1人の人間としてちゃんと認めていっしょに共生して行く。そういう意味での条例を作ればどうなのかということを考えてみました。

もう一つ、日本では外国人の参政権は認めていないのですが、例えば新宿区のすごく大事なものを決める時には住民投票をやるのです。住民投票をやる時には外国人住民にも投票権を与えることは、参政権とは別として可能だと思うのです。そういうことも念頭に置いて、前向きに考えていただければと思います。以上です。

柳田——金根熙さんは、基調発言の中で日韓共生協議会(仮称)のご提案をされましたが、まとめに当たりましてなにか補足されることはありますか。

金根熙——提案はしましたけれど、地元でまとまるのは大変なんです。なぜかと言うと、一つの地域になにに協議会、なににに会、なににに商店街から地元会から、だいたい一つまとめて相当ありますし、足せば少なくとも40、50は回らないと、地元とするとたぶん無理だと思います。だからその分どうするかというものもありますけれど、ぜひ私は一つのネットワークを持ったプログラムを持った日韓で、有識者でも良いし、国連章を持っている方たちを集めて実験してみないとならないかなと私は思っています。

だからその部分で、私が先頭に立って動くか、誰かにお願いするか分かりませんが声をかけた時はぜひ参加して下さい。その部分で具体的に動くつもりです。今日の皆さまの話が言葉だけではなくて、実際に動かないと、アクションを起さないとならないという話は、皆様の共通のお話です。その意味では非常に力になりました。

私が仕事をする一つの原則は自分が出来ることだけをします。それ以上やろうとしたら、非常に難しいから、自分がリスクも負って、自分が責任を持つぐらいのものをやりたいなと思っています。私が出来るか誰かにお願いするか分かりませんが、ぜひやってみたいなと思っています。その時はよろしくお願いします。

柳田——三澤さんと植木さんは、今日のこの会のために、プロジェクターで、パワーポイントで、言いたいことをまとめてくださっています。



ここで続けて二つお話を聞いて拝見して、最後にしたいと思います。三澤さんから始めていただきますか。

三澤——それでは私のほうから一つ防災について、お願いかたがた町ではこういうことをやっているということをお披露目したいと思います。「自分の町は自分で守る。自分の命は自分で守る」という基本的な方針でこれを作成しました。お見せしたいと思います。

「誰もが安心して暮らせる街、いぶき町会」(大久保一丁目、新宿七丁目の一部)これで組織されております。

「いぶき町会の位置」。新大久保駅の東側、大久保通りと職安通りの間の街。赤い線がある所が私どもの町会の位置でございます。

「大久保一丁目の現在の人口」でございます。平成17年1月現在の登録者をここに載せてみました。日本人が2,511名(56%)。外国人の方が2001名(44%)。これは大久保一丁目。私たちの町会の人口でございます。

「大久保一丁目の登録人口の推移」といたしまして、平成7年から17年間の10年間で、日本人はこのグラフを見てお分かりになるように若干僅少しております。外国人は10年間で約2.6倍増というグラフの結果が出ております。…「町の状況」(大久保通り、職安通り)としまして、ここに写真がありますように活気と賑わいに溢れる大久保通り、職安通り。外国人経営の店、韓国グッズの店などが増えておりますという状況でございます。

…「町の現況 住宅地」です。消防活動の出来ない細い路地が多い。そして木造住宅が密集しており、倒壊や火災の危険があるという住宅街でございます。…「いぶき町会の地域防災組織とは」私どものいぶき町会で「地域防災組織規約」というものをこしらえてあります。

3条 当組織は、地震その他大規模災害(以下地震等)に際し、地域住民の隣邦協働精神に基づく実質的な防災活動により、その災害防止軽減を図ることを目的としている。こういう目的達成をするという次の事業を行うということで記載してあります。

4条 当地域内の住民は、ここがポイントでございます。町会員であるか否かに関わらずすべての当組織に参加することが出来る。昭和54年3月からの実施。このような規約となっております。

「避難所とは」ということでございます。公域避難場所としまして、皆さんもうすでにご承知のことと思いますが、大災害時に発生する火災の延焼

から避難者を守るために必要な広さを持った公園等が指定されています。これすなわち戸山公園一帯でございます。そこで避難所が記載されています。大災害時に家屋の倒壊などの被害を受けた人を受け入れ、保護するため、近くの小中学校が避難所となります。運営は地域の町会を中心とした避難所運営管理協議会が行います。食料、生活用品、医療品、資器材、燃料等が用意されています。また簡易トイレも用意されております。右のほうは、避難所の流れの形態が記載されております。

「より良い避難所生活を送るためには」。…これは最近の新潟中越地震で起こったことを、新聞から切り取ったのでございます。避難所ストレスの体調不良とか極限の忍耐ということが記載されております。私どもの避難所ごとにやるマニュアルでは「避難所部屋ごとに班長を選出する。班長の役割、避難所情報伝達、班員の意見、要望集約。班の取りまとめ」という班長の役割があります。

「避難所ルールの作成」は!避難所は共同生活の場で、常に協力し、生活し易い場所とする。避難所の運営・管理に参加・協力する。乳幼児、お年寄り、障害者のある人、怪我、病院、病人のある人をいたわり、助け合う。生活上の不満、要望は班長を通して行うというようなシステムになっております。…「避難所管理協議会とは」。自分たちの町は自分たちで守るという精神から組織されております。左方が組織でございます。

私どもの町会では大久保小学校が避難所に指定されています。その中でいぶき町会、歌舞伎町二丁目町会が中心に運営するということになっております。

「地域防災訓練の実施」ということで、大久保小学校で平成16年の9月5日に実施しました。ご承知の通り、参加案内ちらしを韓国語でも書きまして配布いたしました。このように私どもも!住民としての意識を持っておられる方々にも訓練の実施内容を韓国語でもお知らせするというように心掛けております。

## 地域防災訓練を一緒に

「地域防災訓練の内容」といたしまして、!濾水器やバーナーの組み立て・操作、仮設トイレの組み立て、起震車の体験等を行います。"地域防災訓練の内容。災害医療訓練、備蓄米の試食。備蓄倉庫の見学等を行いま

した。#小型消防ポンプの操作訓練。 消火器操作訓練。煙ハウス体験等を経験しました。どうぞ。

「地域防災訓練参加者」。ここが地域住民が156人、いぶき町会、歌舞伎町二丁目町会、大久保二丁目町会他関係機関65名。そのうち、ちらしを撒いた外国人の参加者は2名でございました。…これから私どもが重点的にしたいと思っていることは外国人と共に取り組める防災対策です。地域に住居する、またはお店や事業所を持っているすべての人が、防災訓練等の行事に参加していただくことを期待いたします。災害時に備え、外国人の方もいっしょに防災対策に取り組みますようにしたいと思っております。以上そのようなことで、パネルを見ていただきます。以上でございます。

柳田——ありがとうございます。引き続きまして植木さん、お願いいたします。

植木——私どもは「大久保百人町地区の環境美化への取り組み」です。地域は職安通りと明治通り、小滝橋通り、それから大久保三丁目の戸山公園を挟んだ地域でございます。

このホテルのまん前で歴史と伝統のある町です。鉄砲組百人隊、こんなものこの地区ではやっていました。この町で「クリーン活動協議会」を16年7月に作りました。我々地域住民と行政との共同により総合的な美化活動を行うということで構成されています。

構成は、4町会に商店会に地域団体で構成されております。新宿区、東京都、新宿警察、こういう行政もいっしょに協同でやって参りました。

これが活動時のユニホームでございます。「大久保、百人町地区の外国人が多く住む街」ということで、ここに数字的なものを出しておきました。地区内の外国人はここ10年で、この数字は2.5倍となっておりますが、先ほど2.6倍ということで出ていますので、このように理解していただきたいと思えます。

「大久保通りの現況」ということで、ご存知のように新大久保駅、大久保駅二つの駅があります。この地区は歩道が狭くて歩きにくい。これが皆様方の定評でございます。

「大久保通りの問題点」。ごみの不法投棄が多い。それから不法看板。商品が多い。放置自転車が多いということであります。ご覧いただくと分かるのですが、これは日本人の捨てたごみではありません。これもやはり日

本人のごみではありません。これも不法看板ですが、いろいろな国籍の方の不法看板です。こちらと同じです。これは放置自転車の件でございます。次お願いします。

成り立ちは「大久保通りのごみ問題地域会議」で、問題にしまして、こういうことを始めて来ました。行政の大久保特別出張所がコーディネーターになって、こういうことを始めるようになりました。

「一斉美化活動の実績」ということでございます。15年12月26日から今年の2月までで、約10回行っております。その中の風景です。これは電飾看板。大久保通りにつきましては、電線がない通りです。それを不法に道路横断をしていますので、これはもうどうにもならないということで撤去しています。その風景でございます。

これは見ていただくと分かるのですけれども、ガードレールに鍵を付けて放置している看板です。これを切っている所です。これは清掃活動です。私どもの町内会のご婦人の方に大変な協力をいただきまして、清掃活動を行いました。これは清掃センターが不法投棄のごみを処理している所でございます。

今度は「クリーン活動協議会」が16年7月9日に発足しましたということでございます。これは皆さんがユニホームを着て新大久保駅の横に集まって、始める前の風景でございます。ご覧いただくと分かるのですけれども、かなりお年の方も若い方も全部で参加してきれいにさせていただいております。

これも電飾看板です。これは私どもがいくらやっても次から次へと出て来るということでございます。これは夕方5時～9時までの夜間のごみの不法投棄の監視所です。不法投棄をされている集積所を行政と町の者との監視をして、この集積所につきましては問題は解決されました。

「ごみの不法投棄対策」ということで、私どもいぶき町会会員の中では、悪質な集積所につきましては廃止をして、全部個別化しました。ということで町会内につきましては、ほぼ解決されている。ただ一部解決されていない所は、世換さんはよくご存知かと思いますが、あるのです。けれども私どもは、問題は将来すぐ解決するだろうと思っております。

「今後の課題」ということで、夜間の放置自転車、看板、ごみの問題、それから路地、要するに通りをちよこつと入った50mぐらいの間の放置自

転車等をどうして行こうかということでございます。

「地区の将来像」ということで、私どもが考えておりますのが「安全で安心して暮らせる街」。このように書いてありますが、基本的にみなさんにルールを守っていただくということですね。そうすれば安全で安心な町をつくって行けるのではないかな。このように思っております。今の資料につきまして後ろのほうに若干部数を用意してありますので、よろしかったらどうぞお持ちくださいませ。

柳田——ありがとうございます。このように日本側、韓国側、今回は「日韓友情年」の一環でやっておりますので、特に新宿区で最も多い外国人の方々である「韓国の方々といっしょに街づくりを考えて行こう」という趣旨で本日のフォーラムを持たせていただきました。この直接の対話が今後良い意味で街づくりのためにどんどん育って行くことを願っております。

最後になりますが、パネリストの皆様全員から一言ずつ、もうお時間がございませんので、本当に一言ずつ本日の感想またはご意見、どうしても言いたい一言をいただきまして、本日のフォーラムを結びとさせていただきます。なお森田さんにつきましては、別のお約束がございまして、先に退席させていただいております。ではこちらから順番に行きます。

小柳——新宿区がいま行政課題として捉えているのは「安全」「安心」「少子・高齢対応」ということです。いま、皆さんの話を聞きながら思ったのは、三澤さんがおっしゃったように防災については地域の問題ですよ。まさに外国の方と交流すること、お互い理解するために交流も必要ですが、それ以上に地域の課題としてお互いにやって行かなければならない時代だとそれをつくづく感じます。

## 協働、参画——区として共通の課題に

それから「協働」と「参画」というのが私どもの大きなキーワードです。その中で李スンミンさんからお話がありました「外国人住民基本条例」とこういうような提言もございます。これについてはいろいろなご意見があるので、今後どう取り組むかはともかくとしまして、大きな課題であるということは、私どもも理解しております。そういった意味で本当に外国人の方々との地域の暮らしもそうですが、新宿区という行政としても共通の課題に対してお互いに取り組んで行かなければならない問題だということ

を改めて感じました。

植木——外国人の方と共生して行くために、来年度区のほうで考えていますのが、各団体が地域会議等の所へ出て来ていろいろな問題を考えて、知恵を出して自分の団体に持ち帰って、また新しい問題をそこで解決して行く。こういうふうに進めて行けば、問題は解決されて行くのではないかな。このように感じております。

李——主なキーワードの一つがやはり「住民意識」だったのですが、でも「住民意識」以外にもいろいろ防災とかネットワークとかこの地域の将来像とかたくさん話すことは、パネリストの皆さんとともにあったのです。5時間というものがすごく長いと思ったのですが、そうでもない。あつと言う間でもっと触れ合わなければならないことがたくさんあったのですが、時間が足りなかったということで、すごく残念です。次回もぜひこういう場を設けていただきたいと思います。と思っています。

私ども外国人としても、外国人住民としての義務を果たす。そういう自覚がもっとより必要ではないかと考えました。私も日本に住んで、日本で皆さんのお蔭で事業をやっているからには、ちゃんと日本のルールを守って、そして税金もちゃんと払わなければならない。この地域にちょっとでも貢献出来るような仕事をしなければならないし、より積極的にいろいろな地域のことで参加しなければならない。そういうふう感じたわけです。ありがとうございます。

三澤——私は一つ日本語学校の先生にお願いがあるのでございます。防災に関して若いエネルギーが避難所ではどうしても必要です。そういう意味でボランティアの組織作りというようなものも考慮していただきたいと思います。防犯対策のマニュアル作りで、住民、韓国の外国人の方のモデルケースになるようなマニュアルを作って情報を発信していただきたい。そのようにお願いしたいと思います。

金根熙——長かったですよね。こんなに長い時間に1人も眠らないで、目がきらきらしていると思って、わー責任重大だと思いました。特に私の話に反応してくださった方が何人かいらっちゃって、あの目は「お前本当にやるかい」という目だったから、責任を感じました。最善を尽くします。ありがとうございました。

金世煥——ありがとうございます。年を取っているといえは年を取っ

ているし、若いと言えば若い世代です。でも、本当は組織の壁を感じます。本音で一言だけ言わせてもらいたいと思います。私は大学の専攻がフランス語でした。意外ですね。(笑)アンドレ・マルローとかが好きで、フランス語を専攻しました。もし我々がアメリカ人であったり、フランス人であったら、そういうシンポジウムが開かれなかったかなと思いましたね、本当に。ある意味では我々のほうは、外人という意識をまったく持たずにいま生活しているのですよね。でも、いまこの場に来て、外国人だなと思いますよ。でも一番尊敬している人は誰ですかと言ったら、私は1人の日本の方の名を挙げます。でもその日本の方は私を外国人とは思わない。思ってくれないんです。いまも電話がたまに来る。いやあ、それでこっちに来て感じます。壁が高いですよね。やっぱり。

「交流」という話は本当におもしろくて、おいしくて、楽しいと思いますよ。でも実際やってみればそんなに簡単なものではありません。だから先ほど申し上げた通り、本当に積極的に参加出来るかどうかの問題です。参加することによって、楽しくなくてももう一回参加したり、続けられるように、皆様のご協力が必要だと思います。外国人ですよ、やっぱり。ありがとうございました。

柳田——先生、最後の最後のまとめをお願いします。

## 「在日」からヨン様が出てほしい

小倉——在日、つまりニューカマーではなくて元からいる在日ですけれども「在日からヨン様が出てください」。私はそう言ったのです。それはいろいろな所で結構言っているのですけれどね。どういう意味かという、在日の方というのは「日本社会は差別をして、ひどい社会だ」と言ってこぶしを振り上げる。そういう人たちだけではないんですよ。この社会にもう60年以上生きていらっしゃる方だから、日本社会を良くしようと思って、必死になっていらっしゃる方が大部分です。

そして「出来れば参政権も欲しい。日本人よりもっと投票に行くだろう」。そういう在日の学生もいます。「日本人の学生なんかに興味がなく投票に行かないのだったら、その分3票ぐらい私にちょうだいよ」。そういう在日の学生もいるのですね。つまりそれだけ意識があって、そしてこの社会を良くしたいという意欲に燃えている人たちがたくさんいるんです。

けれどもそういう所にマスコミはカメラを向けない。だいたい在日の方が作る映画ですとかそういうのだと何か「日本社会が悪い」とか「差別はどのくらいの」とそういうような話ばかり。もちろんそれは非常に重要な話で、解決して行かなくてはいけないことなのですから。そういう強面の在日ばかりが出て来ることによって、日本社会の中で非常に頑張っていて、日本社会を愛している、そういう在日の人たちが見えにくくなっているということがあるんですね。

だから在日からにこにこしたヨン様が出て来れば、日本人はもっと在日というものを見る事が出来るようになる。要するに人の顔として見る事が出来ると思うのです。ニューカマーの方たちも同じだと思いますね。ニューカマーの人たちというのは、日本社会で暮らして行くわけですから。ずっと暮らすかどうか分かりませんが、少なくともここにいらっしゃる方たちは「ずっと暮らして行きたい」とおっしゃっている。

そういう人たちはおそらく日本社会を良くしようということを非常に良く考えていらっしゃるでしょうし、日本社会を愛していらっしゃる方だと思いますよね。だからそういう方たちの顔がもっと見えてくれば、日本社会がニューカマーの人たちを見るまなざしも変わって来るでしょうし、この新大久保、新宿という場所での「実験」も成功するのではないかなと思います。ですから在日からもニューカマーからもヨン様が出てほしいな。もうここに3人いらっしゃいますものね。ハハハ。そういうふうに思います。

司会——ありがとうございました。以上をもちまして、公開フォーラム「東京・新宿発—日韓協力の新しい街づくり」パネルディスカッションを終了させていただきます。(拍手)

パネリストの皆様どうもありがとうございました。最後に、須磨洋次郎(財)新宿文化・国際交流財団常務理事より閉会のごあいさつを申し上げます。お願いいたします。

## 閉会あいさつ

須磨洋次郎事務局長——(財)新宿文化・国際交流財団事務局長の須磨でございます。本日は皆様お忙しい中、このように多数の皆様ご出席、ご参加いただきましてありがとうございました。この種の事業につきましては、



内容がいかに立派でもご参加いただける皆さんが少なければ効果が半減というようなことにもなるわけでございます。

先ほど始まる前15分ぐらいに、ここをちょっと覗いて見ましたら、15～16名ぐらいしかいらっしゃらないので、今日はどうなるかとちょっと心配もしていたのですが、本当に大勢の皆様にご参加いただきまして、ありがとうございます。

今日の主催は、(財)女性のためのアジア平和国民基金と私どもの財団ということになっております。省略形で言わせていただきますが、アジア女性基金の方々のほうで企画をしていただいて、私どもは側面からご協力をさせていたただいたということでございます。新宿区で、このようなフォーラムを企画していただいた基金の皆様にも厚く御礼申し上げる次第でございます。

また今日は最初中山区長のあいさつ、それからお2人の基調講演、そしていまパネリストの皆様にもいろいろお話をお伺いしたわけでございます。それぞれの立場から本当に貴重な普段ではなかなか聞けないような、お話がたくさんございました。皆様もこれから先、韓国と日本の関係ですとか、あるいはまた区長、企画課長等からも話がありました、新宿では「多文化共生の街づくり」をこれから進めて行くということでございます。

私ども財団は、新宿区のそういう施策の最前線でやらせていただいている組織でございます。私どもも精一杯頑張ってお参りますが、やはり地域の皆様のご協力というものが欠かせないと思います。このフォーラムを機会にいたしまして、なお一層皆様のご指導、ご鞭撻、ご協力、ご支援、いろいろいただければ幸いです。本日は長時間に渡りまして、本当にどうもありがとうございました。(拍手)

司会——パネリストの皆様、会場にお越しの皆様、本日は長時間に渡り、ありがとうございます。このあと22階ラウンジ、ムーンライトにて交流会を行います。まだパネリストの方のお話が聞き足りないという方はご参加いただけますので、ぜひお越しください。会費制となっていて、2000円でございます。また記入いただいたアンケートは、出口のほうで回収させていただきますのでご協力をお願いいたします。

## あいさつ、基調発言者プロフィール

### 中山 弘子 NAKAYAMA, Hiroko

1945年群馬生まれ。日本女子大学文学部社会福祉学科卒業。東京都労働局亀戸労政事務所をはじめ、中野区児童青少年部婦人青少年課長、東京都港湾局開発部開発調整課長、同衛生研究所事務部長、同生活文化局消費者部長、同人事委員会事務局長、同監査事務局長などを経て2002年10月退職。同年11月、新宿区長に就任。

### 伊勢 桃代 ISE, Momoyo

東京生まれ。1969年より国際連合ニューヨーク本部勤務。人事採用・研修部長、国連大学事務局長を歴任。1997年退職し、アジア女性基金専務理事・事務局長に就任。

### 小倉 紀藏 OGURA, Kizo

1959年東京生まれ。東京大学ドイツ文学科卒業、電通勤務。同社退社後、ソウル大学大学院哲学科に留学、博士課程修了。現在、東海大学外国語教育センター助教授。NHKテレビ「ハンゲル講座」講師。専門は儒教など韓国哲学。韓国理解のため多彩に活動、「日韓友情年2005」実行委員会委員。著書：『韓国は一個の哲学である』『韓国人のしくみ』講談社現代新書、『韓国語はじめての一步』ちくま新書、『韓国、ひき裂かれるコスモス』平凡社、『韓国ドラマ、愛の方程式』ポプラ社、『韓国、愛と思想の旅』大修館書店

### 金根熙 KIM, Kuen Hee

1956年韓国・木浦生まれ。(株)韓国広場代表取締役社長。ハンシン大学大学院でキリスト教史を専攻、休学し1986年来日、日本語学校。同年(財)流通システム開発センター客員研究員。89年立教大学研究生、90年一橋大学大学院社会学研究科で朝鮮近代史を専攻、博士課程修了。93年、日暮里に韓国食料品店「韓国広場」を開店。94年、大久保(職安通り)に移転。スーパー「韓国広場」、韓国書店「KOREA PLAZA」(97)を経営、「エリート日本語学校」(03)、NPO法人「文化センターアリラン」、NPO法人「高麗博物館」の活動支援。





財団法人女性のためのアジア平和国民基金  
(アジア女性基金)

**ASIAN WOMEN'S FUND**

102-0074 東京都千代田区九段南 2-7-6

マニユライフプレイス九段南 4 階

<http://www.awf.or.jp>

[info@awf.or.jp](mailto:info@awf.or.jp)